291
d
31

蘇峰德富猪一郎著

蘇峰叢書
第二册

名山遊記

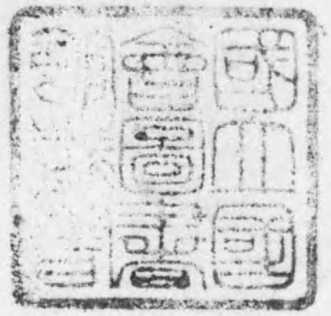
東京 民友社 發行

始

蘇峰叢書
第二册

名山遊記

291
31



2143

名山遊記は、登岳記ではない。岳麓の遊記だ、卽ち富士山を中心として、其の周邊を徜徉したる遊記だ。之を名山遊記と稱するは、何れの方面を旅行するも、恆に富士山を目標としてゐるからだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

さりとて予には登岳の經驗が無いでは無い。明治十三年七月下旬、予は友人兩輩と東海道を徒歩して、東京に赴く途次、偶ま岩淵驛に差しかゝり、近く富士山の面目を見て、登岳の念、勃然として生じ、富士川を渡らずして、川岸に沿うて溯り、大

宮驛に一宿し、翌朝午前三時、淺間神社の清水に身を淨め、登岳の望を果し、頂上の石室に一宿し、御來光を拜し、須走に下り、竹下より足柄を踰えて、小田原を過ぎ入京した。當時十八歳。今や六十六歳。其の期間は餘りに離隔してゐる。但だ一回登岳すれば、更らに之を繰り返す必要はない。

* * * * * *

然も岳麓の廻遊に至りては、百回尙ほ饜かない。世には不二行者となりて、登岳の數を誇りとし、或は五十回、或は八十回などと、其の回數を石に刻して、登山入口に建てたるものが鮮くない。されど此れは宗教的信仰によるものにして、我等の如き風景好尙者としては、富士山に上りては、とても富士山の面目は分らない。富士山の觀相は、唯だ下から眺むるにある。或は近く、或は遠く、或は高く、或は低く。其の眺むる季節、天候の如何によりて、凡有る趣向が出で來る。予曾て句あり、曰く『名山不要看山訣。遠近高低到處宜』と。

* * * * * *

維新志士の先達、村田清風の作に曰く、

來て見れば聞くより低し富士の山
　釋迦も孔子も斯くやあるらん

此れは舜何人ぞ、我何人ぞとの氣分を言ひ現はしたるものに

て、決して富士山に對する批判ではない。富士山を高いとか、低いとかとの標準もて批判するは、全く見當違ひだ。富士山の名山たる所以は、高きにあらず低きにあらず、眞に靈妙自然の山であるからだ。

昭和三年一月廿四日　大森山王草堂に於て

蘇峰學人

蘇峰叢書第二冊

名山遊記

目次

富士見臺詩碑建立の記……一
一　建立の由來……一
二　詩碑の建立……三
靜岡遊記……六
一　小鹿山の茸狩……七
二　天下の絶景日本平……一〇
三　牧野原の茶圃……一三
四　牧野原茶圃の由來……一六
五　聖武天皇の天平感寶の勅書……一九
六　御前崎の燈臺……二三
七　吉田村……二六
八　富士禮讃……二八
富士見ずの記……三〇
富士見廻遊……三二

目次

美保灣舟遊……三七
鐵舟寺より靜岡……四一
靜岡より東京……四五
岳麓たより……四八
山中湖と河口湖……五一
靑龍寺より大森まで……五六
嶽麓三日遊記……六〇
一　御殿場より吉田……六〇
二　吉田より精進湖……六三
三　本栖湖の姫鱒釣……六六
四　富士の風穴……六九
五　烏帽子嶽登臨……七三
六　精進湖より大森……七五
七　信玄と甲州人……七八
岳麓遊記……八二

一　御殿場より山中湖……八二
二　山中湖一週……八四
三　大石茶屋の蓮華躑躅花……八七
四　大石茶屋より芙蓉倶樂部……八九
五　忍野村と芙蓉倶樂部……九一
六　忍野村と富士山……九三
七　歸途に就く……九六
休養小遊記……九八
一　御殿場靑龍寺……一〇〇
二　靑龍寺及び其の附近……一〇五
三　靑龍寺から芙蓉倶樂部……一〇八
四　蕎麥……一一〇
五　銀彈亂射……一一三
六　仙石原より大森……一一六
寶珠莊の半日一夕（其一―其三）……一二二
靜岡の半日一夕……一二七
一日半の遊行……

目次

三日の旅……一二九
東海閑遊（其一―其三）……一三五
伊豆遊記……一四三
一　大森より伊東……一四三
二　伊東遊覽……一四五
三　伊東概說……一五〇
四　伊東　修善寺　天城……一五三
（伊豆伊東より　葉書）
五　天城を踏ゆ……一五六
六　模範村白濱……一五九
七　下　田　港……一六二
（下田より　葉書）
八　柿崎辯天及び蓮臺寺溫泉……一六五
九　月夜の下田港……一六七
十　下田を去る……一七一
十一　下田より手石石窟の彌陀三尊……一七三
十二　竹麻より子浦……一七六

十三　石室崎……一七九
十四　子浦よ、さらば……一八五
十五　仁科村及び其の洞穴……一八八
十六　土肥溫泉……一九一
十七　沼津より大森……一九三
二日の小遊……一九六
一　湯河原曾見……一九六
二　熱海……一九八
三　初島……二〇一
四　日金山　十國峠……二〇三
五　熱海餘言……二〇六
熱海の一日……二〇九
一　伊豆山の發掘物……二〇九
二　伊豆山の社格……二一一
長興山莊遊記……二一五
一　長興山莊……二一五

目次

二 午後の散策……二一八
三 函山一周の記……二二〇
四 小田原城……二二四
五 蓮上院と飯泉觀音……二二六

蘇峰叢書
第二册

名山遊記

富士見臺詩碑建立の記

一 建立の由來

予曾て句あり、

名山不レ要看山訣。　遠近高低到處宜。

と。實に富士山は何處から眺めても、結構。北齋の富士百景の繪を見ても、全く其通り。汽車の窓からでも、茶店の腰掛からでも。

併しながら別けて清水の不二見邊からの眺めは絶景だ。曲亭翁も龍華寺の富士に就て、記してゐる。然も龍華寺のみには限らない。鐵舟寺からも妙。其の丘陵一

帶からの眺めは、何れも同樣である。

予は度々鐵舟寺の招かれざる客となつた。和尙は予の尤も好む和尙、富士は猶更ら。而して其の附近の諸有志、亦た質實にして飾りなく、心置なく談笑するに足る。

大正十一年十一月十七日、上方に於ける史料採訪の歸途、鐵舟寺に一泊するや、談偶ま詩碑建立の事に及ぶ。鐵舟寺和尙は勿論、石野、北村、深江の諸君、靜岡の小杉君、予が同行の高橋君、何れも之を贊成し、直ちに其の實行を決し、座中の諸君期せずして、其の委員となるを快諾した。

當時予は諸君に向て、斯く申した。元是れ洋服細民たる予の企てなれば、一切の負擔は、勿論予が任ずるも、成る可く手輕に、成る可く格好に願ひたしと。諸君皆な其旨を領し、其通りに取り計らうた。

やがて諸君の盡力にて、土地の撰定が出來た。それは杉原山と稱して、鐵舟寺の附近、孤起したる小丘である。諸君の說には、龍華寺よりも、鐵舟寺よりも、寧ろ此の頂上の眺めは、妙であると。予は諸君に信賴して、一切を一任した。

然るに十二年九月には、例の大地震があり、詩碑建立などは、とても思ひも寄らぬと諦めた。諸事漸く恢復の緖に就くと同時に、初心禁じ難く、本年の初から、そろ〳〵それに著手し、東京では高橋君、淸水では北村君、其の專務委員として、盡力せられ、前記諸氏の外、地元の望月君、亦た頗る道路修築の事などに、骨折られた。而して淸水市の諸有志及び市役所も、此擧に同情して、便宜を與へられ。特に妙音寺區の靑年諸君などは、我事の樣に盡力せられた。斯くて諸君の期せざる戮協にて、詩碑は愈よ足掛け五年振りに建立した。

二　詩碑の建立

大正十五年十月廿四日午前五時、大森山王草堂を發した。同行實に二十一人。其の大半は子供連であつた。予も詩碑建立の施主として、せめて子供達を樂ましめ

たしとて、故らに案内した。それに附隨する大供達は、云ふ迄もなし。

好天氣。富士は既に汽車の窓に映じて來た。沼津から池谷先生其他諸有志の同行せらるゝあり。江尻に著すれば、意外にも市會議長鈴木君、助役新村君の接伴にて、清水市から一行を、午餐に招待せられた。清水の市街を出づれば、途上は人や車が、お祭りかの如く雜沓してゐた。而して鐵舟寺山門の前には、綠門が設けられ、大旭旗が翻つてゐた。花火も幾發か上つた。山門內は時ならぬ群集を見た。

斯くて杉原山にて、除幕式は行はれた。神官の淸祓あり、幕は予の嫡孫女の手にて除かれた。成る程委員諸君の誇り說いたる通りである。實に絕景と云ふの外はなかつた。當面には薩埵、淸見關の上に、富士山が聳え、眼下に三保の松原が横はり、駿河灣から箱根、天城、伊豆の半島一帶は、風帆出沒の間にある。而して左顧すれば、遙かに駿遠の諸山、近くは駿河の平郊、村落、悉く一眸の中に鍾つてゐる。

此れから鐵舟寺本堂にて、其式を行うた。小杉君司會者となり、北村君設立事務報告をなし、予挨拶し、松本知事の演說あり、それから淸水、靜岡兩市長を始め、其他諸有志の祝詞あり、最後に石野君によりて、無事閉會を告げた。

固より洋服細民たる予の施行なれば、折角の來會諸君には、何の御馳走もなく——立食さへもなかつた——只だ扇子と、菓子と、餅とを呈したるに過ぎなかつた。

然るに地元の諸有志は、我事の如く、痒き所に手の届く迄、彼是周旋せられた。而して靜岡縣知事を始め、諸有志が、特に來會せられたるは、予の慚惶に禁へざる所である。此れと申すも、畢竟富士山のお蔭であらう。

地元の諸君は、鐵舟寺山門から、杉原山の頂上迄、行燈百數十基を建られた。予等は點燈の後を待つて、再び山上に登つた。實に飽かぬ眺めである。縱令淸水市が繁昌して、俗化するも、とても富士山を俗化する力はあるまい。富士山が俗化せられざる限りは、富士見臺の眺めは、決して失墜せられまい。

詩碑の石に刻したのは、

日夕雲烟往又還。　青霄縹渺是仙寰。
名山不レ作不平色。　白髪昂然天地間。

である。此詩は池谷先生の誨正を乞うたが、先生の改刪は餘りに立派過ぎたる爲め、原作通りとした。此れは負惜みではない、素人は素人でも、其の本色を存せん爲めであつた。先生雅量、希くは之を諒とせられよ。

東海勝區天下奇。　高寒岳雪映双眉。
著書未レ就千秋業。　空託新詩一片碑。

唯だ此の一片の碑が、富嶽と共に長へに存せんことを、祈りて置く。

（大正十五年十月廿五日午前六時、靜岡大東館に於て。）

靜岡遊記

一　小鹿山の茸狩

十月二十五日、小杉君、貞松葵文庫館長等の肝煎にて、松茸狩に案内せられた。予は少年の頃、松茸狩の本場とも云ふ可き、京都に足掛け五年を過したれども、未だ一度も其の例がない。何も經驗の爲めとて、欣諾した。一行の大部分は、久能、三保、清見寺見物に赴いた。予は老妻、並木君、金田君、及び遠州日坂の伊藤君を伴うた。肝煎の二君は云ふ迄もなし。

予は先月新橋停車場にて、誤つて顚倒し、左脚の關節を傷め、今に若干其の自由を失うてゐる。瓔珊たる躄足にて、山阪を驅馳するは、とても困難だと思うたが、物は試しとて出掛けた。

當日も亦た好天氣。我等は東海道の並木の中を輕く走りて、やがて右折し、豐田村に赴いた。天上片翳なく、地下黄雲穰々、今秋の豐稔を示してゐる。豐田村に入れば、小溝には水流れ、槇の生垣立ち並び、庭にはダリヤ、コスモスの殘花

が散り剩つてゐる。正に是れ晩秋一幅田家の圖。

字小鹿に至り車を下れば、當日の東道者たる田宮君を始め、村長、區長、村會議員、青年會の幹部諸氏出で迎られ、直ちに山へと案内せらる。此邊山巔から山腹まで、茶ならざるはなし。靜岡縣は全國中重なる茶產地にして、豐田村は縣下の重なる茶產地の一と云ふ。茶株は何れも奇麗に、刈り込んで、何となく洋行歸りの紳士の頭髮然としてゐる。而してまゝ、刈り込み最中のものもある。此れは四番刈と云ふ。古は茶摘と云うたが、今では器械で茶刈である。

それからそろ〳〵山路にかゝる。樹上には秋禽が囀つてゐる。樹下には秋花が咲いてゐる。柿葉は淺絳を染めてゐる。ぽか〳〵と秋陽は樹間を漏れて照らしてゐる。松茸の有無の如きは、寧ろ論外だ。

此れから松茸山に分け入りて、それ〴〵獲物があつた。固より自力でなく、他力だ。案内者諸君の發見したのを採取する迄にて、此ならば極めて樂である。人工的に植附けたのでない丈が、せめてもの申譯であらう。

併し斯る愉快なる天地にも、猶ほ一個の除外例があつた。最早長虫は土中に蟄するの時節だが、此邊の暖なる爲めにや、偶然大なる山かゞしが、道中に横はるに出會した。併し世智辛らき世の中、此邊迄も蛇取りが入り來りて、殆んど見る稀れなりと云ふ。而して縣下の某地方の如きは、餘りに蛇を取り盡して、野鼠蕃殖し、畑物を喰ひ荒らし、閉口してゐるとか。

我等は松林の中、極めて展望好き場所を占めたる休憩所に入り、此處にて松茸盡しの馳走に預つた。

元來小鹿の松茸山は、豐田村字小鹿の共同物にて、其の經營も亦た其區の人々によりて行はれ、休憩所の設備や、料理一切の事も、他手を藉らず、自から農隙に作す所と云ふ。斯る山中にて、斯る清素の馳走に預らんとは、實に全く豫期せざる愉快であつた。

東道の田宮君は『國民之友』以來の、拙著愛讀者にして、案内の青年諸氏にも、國民新聞を通じて、予の指導を忝うしたと云はれたる方々のあつたことは、予に取りて、如何ばかり嬉しかつた。

二　天下の絶景日本平

此から山を下り、道を東海道へとり、更らに草薙神社に至る。此處は有度村にて字草薙と云ふ。延喜式内の縣社である。日本武尊が、東國お下りの節、賊起りて野に火を放つたが、尊劍を拔いて之を鎭め給うたのは、卽ち此の地方であると云ひ傳へてゐる。その所緣の草薙村、その所緣の草薙神社。

社前には有度村戸塚助役、社司、小學校長、其他諸有志出迎られた。社内は老木欝蒼、特に八十幾尺と云ふ楠の、空洞を剩し、その中から新樹を生じてゐるは、尤も奇拔だ。但だ此程の神社にして、何等舊記、古文書の見る可きものなきを遺憾とする。

此れから愈よ日本平に向ふ。此處は日本武尊が、草賊を平げ、四方を詠め給うた地と稱せられてゐる。有志諸君は、予及び老妻の爲め、途中迄、自轉車の後に附くる荷物車二個を用意せられた。折角の厚意なれば感謝して乘つた。

身は宛も是れ杜樊川の『遠上寒山石逕斜』の詩中の光景裡にある。但だ此の炭屋の小僧さんや、八百屋の小僧さん達が、お得意の家へ、其の註文物を運ぶ車に、老人夫婦を乘せ、挽き行く樣は、山中であればこそ。若し此れが銀座街頭ならば、全く乞食爺と、乞食婆以上の値踏はせられまい。

此邊亦た茶畑が多い。山を拓き、小石を積み、段々畑を作りてゐる。やがて車を捨てゝ石逕を上り行く。上るに從ひ、茶畑は一變して野菜畑となり、菜や、人蔘や、白菜や、大根の類がある。上りつむれば、乍ち駿河灣から伊豆半島を見る。而して大なる峻谷を隔て、削り成したる如き孤峰が、久能山だ。

我等は一歩を踏み外せば、數百尺の谷底に墜落す可き、馬脊の如き小笹茂れる小

徑を通り、漸く日本平に近きつゝ行く。やがて松山やら、小篠野を過ぐれば、一望涯なき茶や、大根畑に出づ。此れが所謂る日本平だ。

此の山上の平地が、幾町歩あるやを詳にせざるも、餘程廣き面積がある。少くとも大觀兵式位は出來さうにある。而して其の眺望に至りては、賴山陽が耶馬溪ではないが、實に天下第一と申しても、差支あるまいと思ふ。

何たる仕合であらう。富士は全身を露はしてゐる。我等は遠州の御前崎から、伊豆の石廊崎まで、殆んど殘る隈なく展望するを得た。薩埵嶺や、清見關や、興津や、清水や、三保や、靜岡や、龍爪山や、文珠山や、安倍川や、大井川や、若しくは天城山や、箱根一帶の山や、悉く指顧の中にあつた。老妻は十國峠の眺望以上だと申したが、予も或は然らんと思うた。

諸君は予に向て、戯れに此處にも詩碑は如何かと云ふから、人間は足るを知るを貴ぶ。杉原山にてさへも、餘りに結構過ぎると思ふ。まして斯る天地の大文章に對しては、人間は唯だそれに隨喜感悅すれば澤山であると、笑つて答へた。

予は斯る勝地を、此儘放拋しつゝある靜岡縣人士の、心持が分らぬと申したい。之を大遊園地とするの可否などを議論するよりも、せめて此の日本平に上る道を作り、道標にても立てたらば、如何かと思ふ。而して此文を讀むの君子も、子に誑された積りにて、必らず一度來觀せられよ。予は獨り自から斯る好景を私するに忍びず、敢て之を天下同好の君子に告ぐ。

予は返す〳〵も諸君が、予を日本平に案内せられたるを謝す。實は足痛の爲めに、プログラムを取消んとの議もあつたが、予は好景と聞いては、脚の一本位は失うてもと申したから、諸君も喜んで案内せられた。凡そ世の中に馳走と云ふ馳走の中にて、好景を觀る程、有り難きものはない。

（大正十五年十月廿六日午前六時、靜岡大東館に於て。）

三　牧野原の茶園

十月二十六日、静岡縣茶業組合聯合會議所會頭中村圓一郎君の案内にて、牧野原の茶園視察に赴く。中村君は静岡縣選出貴族院議員にて、予と貴族院にて相識である。君は静岡縣茶業興隆の功勞者中の、重なる一人であることは、現在の會頭たる位置を見ても知る可しだ。

今朝は前日よりは寧ろ秋晴は、一入さえてゐる。金谷驛にて、汽車を下り、直ちに牧野原に向ふ。右すれば諏訪城址を過ぎて、佐夜の中山に向ふ。我等は左折して阪を上る。上りて二本杉に至れば、突兀として、花崗石劍形の、榛原郡茶業組合創立三十週年紀念碑が建つてゐる。此處にて伊藤組合長其他より茶菓の接待を受けた。

此處の富士の眺めは、亦た別樣の觀がある。衆峰簇擁の際に、氣高き富士は、其の上部を露はし、宛も富士の胸像を見る心地がする。而して眼下に展開する大井河原は、向岸島田側の落々たる長松の堤防より、逶迤として、遠州洋に趨く所、覺えず我をして、蒼茫萬古の情を起さしむ。

此からは一氣に茶圃の間を行く。牧野原は、概約南北六里、東西二里の一大高原にして、本來入會の牧草場であった。これが維新以來開拓せられ、今や殆んど三千町歩に垂んとするの茶圃が出で來つた。是れ實に偉觀である。

我等は國立茶業試驗所に立寄り、前田技師から、其の說明を聞き。更らに其の茶葉刈採より、蒸し、揉み、乾かし、仕上迄の一切を、見學するを得しめられた。

予は幼時製茶、養蠶の二事に付ては、少しく知る所あるを以て、殊更ら興味の饒きを覺えた。

前日豐田村にて見たる所の、内田式採葉機を採り、自から茶株に向て試みたが、成る程輕便、且つ調法のものだ。此れでは手摘に比して、四倍の效果ありと云ふも、不思議はあるまい。

此れから縣立の茶業試驗所にも立ち寄つた。本來は中村君等の私設であつたが、

今や縣立となつてゐる。此處には支那、臺灣、印度、錫嶺各地の茶樹を、試驗的に栽培してゐる。又た各種肥料の效果をも、それ〴〵實驗しつゝある。見渡す限り、洵とに善美を盡したる理想的の茶園であつた。

四　牧野原茶園の由來

荒草茫々たる牧野原が、花園も及かざる茶園に化したる歴史は、時代の變遷を語りて、極めて面白い。大井川の徒渉が廢せられ、川越の雲助、人足等が、失業者となつた曉に於て、彼等救濟の爲めに、開拓に從事せしめたのが其一。德川幕府瓦解に際して、其の壯士連の處分に窮し、彼等をして職に就かしめたるが其二。而して其二が、最も尤なる原因をなしてゐる。

予は此事に就て、屢ば海舟翁の昔語りを聞いた。然も予が之を傳ふるよりも、翁をして自から傳へしめた方が、最も精確であらう。

明治元年、官軍我江戸に逼る。終に城池を致して去る。此時君等〔中條景昭、大草高重の徒〕我〔勝海舟〕に告て曰く、時勢爰に至る、今將た何をか陳せむ。然りと雖も我輩同志五百名、辱を忍び、聲を呑で、脫走暴擧せざるは、君命を守ばれ也。今や喪家の狗の如く、空しく故國を捨て去る、其心中勅如言に忍びざる者あり。同志中その純を選拔し、一百名、從容義に因り、城内に入り、屠腹一死を以て、主家數百年の恩に答へむ。君又機を失せしむる勿れと。慷慨悲憤、涙血襟を濕す。余その心程の忍ぶ可らざるあるを察し、深く其言に感動す。後答へて曰く、君等の此擧可は則可なり。余が考へは反せり。今哉天下新に定まる。人心の不測知るべからず。此時にして空死す、何の益あらん。我君等を以て、駿河久能山に據らしむべし、君等精を養ひ約を堅くし、一朝不測の變あらば、死を以て時に報いば如何。宜しく熟慮以て其去就を決せよと。後君等此義を可なりとし、終に去て久能山に入る。後國家益〻無事、君等再び余に告て曰く、今や形勢如レ斯、空しく久能に在り、徒食老死せん、我輩誠に本意にあらざ

る也。聞く遠江國金谷原は（牧野原）磽确不毛、水路に乏し。民捨てゝ顧みざること數百年、若し我等をして此地を與へば、死を誓て開墾を事とし、力食一生を終らんと。我是を聞、感激殊に甚し。終に其行事を斡旋す。今や開墾その緒を成せり。今年（明治十一年）聖天皇北に巡し、輦輿我靜岡を過ぐ。君等の勉勵、叡聞、召見てその篤志を感賞し、千金恩賜ありと。我これを聞て感嘆し、曰く嗚呼君等一死の誓、三變し。今に及び小を捨て大に移り、國家有益の大業を成就す。其始確乎たる精神、至誠にあらざれば、何ぞ如レ斯ならんや。然りと雖も、今より後益ゝ勉勵友愛して、毫も賞に驕り、逸に失し、此聖天子の恩賜を辱しむる勿れ。今や其開墾の淵源を述べ、後世君等の子孫に傳へ、其祖の勉勵困苦、終に此盛典に遭遇せるを知らしめむとす。

明治十一年仲冬

友人勝安芳記して

牧之原諸君に呈す

當時鳳輦に供奉したる岩倉右大臣の達文は、左の通りである。

一　其方共己巳（明治二年）以來拓地の事に盡力し、同志協戮勉勵牧之原開墾候儀、其方共率先の功不レ少、奇特に被二思召一、同志中へ金千圓下賜候事。

されど彼等は、年と與に他に移轉し去り、其の開墾せられたる土地は、地方農家の所有に歸した。而して小林年保、丸尾文六、三橋四郎次、伊藤幸一郎、木下七郎、其他の諸氏巨資を投じて、遂ひに今日の盛況を見るに及んだ。乃ち大正十四年度に於ては、榛原郡のみにて、茶圃二千六百餘町に及び、產額三百五十萬圓に垂んとしてゐる。

五　聖武天皇の天平感寶の勅書

斯くて我等は、茶圃の間を疾驅して、一路相良町に抵り、平田寺に赴いた。平田寺は別に特色ある禪寺ではない。但だ田舍寺は概ね亞鉛葺と俗化しつゝあるに、

此寺は茅葺であるだけ取柄だ。

併しそれより人を驚かすは、聖武天皇天平感寶元年の勅書だ。此の勅書が、如何なる來歴もて、此の遠州洋の怒濤吼る海村の寺にある乎。そは何れにしても紛れもなき難有きものだ。

此れは續日本紀に、

詔給二大安、藥師、元興、興福、東大五寺、各絁五百疋、綿一千屯、布一千端、稻一十萬束、墾田地一百町一。

とある。則ちその一だ。

今日に於ては、此の文書の現存するものは、唯だ此の一通だけだ。但だ藥師寺に給はりたる同一文書の、鎌倉時代の寫本が、大和中村雅眞氏の許に在る由――予はその寫眞板を見た――にて、此れと參照するには、倔竟の資料であるが、其の原書は今日の所では、此の一通丈、其の存在を確められてゐる。

此の勅書は、大安寺か、元興寺か、若しくは興福寺、東大寺の何れ乎。一寸見當が附かぬるが、然も上記の四寺の、或る者に賜はつたもので、決して平田寺に賜はつたものではない。されど平田寺は何よりも此の勅書の所藏者として、日本に其誇りを持つてゐる。

此の勅書の、勅の一大字は、聖武天皇の宸翰、奉勅諸兄の四字、豐成の二字、行信の二字、何れも自署に相違ない。諸兄に正一位行左大臣兼太宰帥橘宿禰諸兄の長銘があり、豐成には右大臣從二位藤原朝臣豐成とあり、行信には大僧都法師とある。諸兄が橘氏の棟梁であるは云ふ迄もない。豐成は所謂る中將姫の父、行信は藥師寺僧と、續日本紀に掲げてある。

文字は三百廿九字、天皇御璽の方二寸の朱印が、滿紙に捺して其數三十。而して天平感寶元年閏五月廿日と記してある。云ふ迄もなく、天平感寶は、元年の七月に天平勝寶に改められた。

誰れしも、天平經を見る者は、先づ其の筆跡に隨喜せぬものはない。されど經文の字は、寫經生の手に成りたるものにて、動もすれば餘りに型に嵌り過ぎたる嫌ひがある。然るに此の勅書は、何人の筆に成つたか知り難いが、端麗なる楷法に、やゝ行書の體を交へ、規律の中に自から自由あり。其の筆力や莊勁にして渾厚、肉もあり、骨もあり、良とに申分がない。歐褚をして毫を搦らしむるも、此に過ぎまいと思はれた。

予は十日の糧を齎らしても、此の一幅を拜見する丈の價値ありと考へた。而して和尚及び檀徒諸君に向て、舌長き申分ながら、御當地には勿體ない程であると申した。

若し田沼玄蕃頭が、好古の僻ありたらば、賄賂搾取の大博士たる彼にして、いかで之を見逃がす可き。現に東福寺の寺寶たる可き、開山聖一國師に與へられたる、無準和尚の書牘さへも、京都所司代であつた若州小濱の酒井忠義に、捲き上られたではない乎。（此の一幅は一萬九千五百圓にて、十月廿五日入札となつた）果して然らば田沼意次の無學も、却て寺寶の爲めには、仕合であつたと申したれば、滿座の諸君、何れも破顔一笑した。

六　御前崎の燈臺

意外にも公會堂にて、相良町有志諸君に迎られ、午餐の馳走を忝くした。早朝よりの奔走にて、別して旨かつた。相良は遠州洋の殆んど眞中だ。伊豆下田へ廿七里、志州鳥羽へ四十里、而して四季捕物は、海老、鯛、鮑等と、遠江國風土記傳にはある。然るに近頃は――大地震以來――鰹が近海に取れ初め、本年は殊に大漁と云ふ。されば鰹の刺身の新鮮云ふ迄もなし。更に驚く可きは、二尺もあらんと思はるゝ大海老――此處では伊勢海老と云はず、相良海老と云ふ由――が、大皿に溢れ出たることだ。流石の健啖者も、漸く其の片身だけを盡し、全く參つた。

此れから一路御前崎の燈臺に向つた。此の方面は、甘藷切干の名産地とて、見るとして甘藷畑ならざるはなし。此れは明和三年三月六日、薩州藩の運送船豐德丸の難船を、御前崎村の大澤權右衞門なる者、其の二人の子と共に死力を盡して濟ひ、その禮として、船員の食糧としたる甘藷を申し受け、それから當地一般に擴つたと云ふ。當地は秋冬の節、最も烈風多き爲め、切干を作るには、特に便宜が多く、斯くて自然に切干が當地の名産となつたと聞く。

燈臺守の案内にて、御前崎の燈臺に上つた。此の燈臺は、第一等級にて、水面より燈火に至る實に一百七十三尺。其のレンズ外は、六十三萬燭光にして、十九浬半に達す。

我等は燈臺の上から遠望した。此日は當地方に珍らしき程の凪ぎにて、遠州洋上も疊の如くであつた。富士は遙かに其髻を雲外に出してゐた。海洋には鰹船が幟を建てゝゐる。此れは大漁の徵と云ふ。鷗が水上を近く廻りて翔つてゐる。此れは鰯の群集したる徵と云ふ。燈臺守はその下なる岩礁を指し、彼處には先月の暴風にて、四百噸の船が難破した。その爲めに十九人溺死し、その中には朝鮮人も、支那人もゐたと語つた。

燈臺守の話には、渡鳥が燈光を見掛けて衝突し、燈臺の外欄には、堆をなすことあり。その中には鶴、鳩、杜鵑、鶯、其他の小禽中には珍鳥も少からず。概して大なる禽は猛烈に來り衝突し、腦震盪を起して斃るゝが、小禽は其儘硝子壁の外に佇み、天明を俟つてゐる。されば夜中之を捕獲するは、極めて容易であるが。彼等が遠洋飛翔の勞を思へば、成る可く天明を待つて飛び去らしむ。又た杜鵑は中々思慮深き鳥にて、燈光に近き來るも、決して衝突はしないと云ふ。

予は嘗て知人スチルマン翁が、自から狩獵狂であつたが、早曉海岸に、渡鳥が疲れて半死半生の體にて、憩ひつゝあるを見て、以來銃を手にするを廢したとの事を、端なく燈臺守の話にて思ひ出した。

七　吉田村

此れから相良町に引き返し、川崎町を徑し、吉田村の能滿寺に至り、その蘇鐵を見た。此れは同行の三宅博士に取りては、定めて研究の資料となるであらう。樹齡六百五十年と稱してゐる。兎に角不二見龍華寺のよりも、堺の妙國寺のよりも、偉大なる代物である。

此の寺には武田、德川の古文書がある。此の地方が、武田、德川の爭地であつたことが判知る。中にも小濱景隆の天正二年六月朔日、能滿寺禪室當の文書には、

右武田勝賴賢太守、遠江御發向之刻……前住卽化寺文能、異ニ衆好惡ニ賴ニ家康ニ退出、故甲乙人無ニ一宇ニ引散令ニ頽破ニ此罪太海淺云々。

との文字の如き、前住が家康方であつたことが判知る。

尙ほ家康の妾の一人、茶阿局の消息四通ある。何れも能筆だ。茶阿局は、金谷の賤しき者の妻であり、代官が彼女を奪はんとして、其夫を殺したのを、彼女が直訴して、却て家康寵妾の一人となり、辰千代、松千代の二子を生んだ。松千代は夭したが、辰千代が上總介忠輝となつた。

御音信とて見事の栗一折給候。いはれざる御氣遣、御はづかしく思ひ參せ候。此よりも文のしるしばかりに、杉原(紙)二束參せ候。めでたくかしく。

などの文句がある。賤しき者の女房でも、家康に仕へてからは、それ〳〵學問もしたのであらう。

我等は豐年滿作の中を駛りて、中村君の邸に入り、家族の方々の驩待にて、其の馳走に預つた。屋敷は三萬坪の大地積の一部を占めてゐる。君は醬油と、茶とを製造してゐらるゝ。此れでは禁酒會が繁昌しても、決して心配には及ぶまい。君の大人圓藏翁は、篤志の人にて、君亦た其の業を擴げ、家道頗る隆。德川靜岳公も、今春來訪せられたと云ふ。其の署名簿の末に、予も需に應じて『喬木長在』の四字を認め、其の家運の繁昌を、長へに祝福した。

此れから薄暮大井川を渡り、島田にて汽車に乘り、靜岡に著したのは、午後六時三十分であつた。當日は午前七時三十七分に靜岡を發したれば、殆んど終日を、奔走に費した。然も得る所は勞に倍した、此れ畢竟好案内者の惠澤だ。

八　富士禮讃

此行は富士見臺詩碑建立が、唯一の目的であつた。然るに更らに二日を靜岡縣の安倍郡、榛原郡の見物に費した。而して三日の間、何れも好天氣にて、富士は恒に我等を送迎した。

予は一富士、二鷹、三茄子の吉夢が、曾て家康より出でたと云ふことを聞いた。即ち家康の晩年老を駿府に養ふや、其の三要件として、恒に富士を眺め、好みの鷹狩をなし、嗜める茄子を喫――恐らくは今日の久能附近の促成野菜から推せば、初茄子であらう――する本事から、出で來つたものと云ふことだ。歴史家としての予は、斯る昔話を眞面目に取り扱ふ必要は認めない。されど一書生たる予は、此の話に興味を持つてゐる。

家康が富士を愛するとせば、家康も頗る話せる好漢だ。併し老いても租米の受取は、直筆で書くが、詩の一首をも作らない家康は、果して富士を愛したる乎如何。家康が愛したるにせよ、愛せざるにせよ、日本國民の大部分は、何れも富士を愛しないものはない。十月廿七日早朝靜岡を發するや、汽車中は、實に鮨詰の姿であつた。されど當日も富士は顔を出してゐた。予が向側の男は、寫眞機を出して、富士を撮してゐた。又た他側の一人は、頻りに富士を指して、其の同行の婦人に、之を見る可く氣附けてゐた。若し人間として、最も崇愛する代表者を擧げなば、我が國民は、異口同音に、恐れ多くも明治天皇と申すであらうが、山の代表者は勿論、富士山であらう。

東湖先生が、『秀爲二不二嶽一、魏魏聳二千秋一』と詠じたのは、良にその通りであつて、我が大和民族の國民性は、實に此の靈山に由りて、代表せらるゝものと云ふも、

過言ではあるまい。

永い期間には、海が山となり、山が海となることもあらう。されど我が大日本帝國の存在する限りは、此の富士山は、帝國と興に存し、長く帝國の象徴と爲るであらう。

富士山を禮讃するは、萬葉の歌客以來の事、決して今日に始つた話ではない。されど一日相見れば、一日新たなるが如く、千載相見れば、千載新たなるが如し。此れが富嶽の靈山たる所以である。（大正十五年十月廿八日午後二時、山王草堂の雨窓に於て。）

富士見ずの記

駿州清水灣に赴き、三國一の富士の山を見物す可く、五月三日、大森から故らに緩行汽車を擇んで出掛けた。そは途中富士山の麓を廻りて、飽く迄其の光景を賞せんが爲めであつた。同行五人、妻と娘兩人、及び高橋君。高橋君は我が修史室專屬の一人である。

富士山は予に取りて決して久濶の友人でない。苟も天氣さへ好ければ、我が湘南の觀瀾亭から、臥してゐても、坐してゐても、立てゐても、恒に相見る。晝は勿論、月夜抔は別して面白き風情を現呈し來る。然も同一の場所から眺むるよりも、所を換へて見れば、又た一層の面白味がある。故に今度は駿河なる清水灣の邊、富士見村の鐵舟寺に赴き、三保松原を前景としての富士を觀る可く出掛けた。されば其の目的に副ふ可く、途中も悠々として富士と揖して過ぐ可く、斯くは豫定の計畫をしたのであつた。

然も豫定の計畫は、見事に外れた。緩行汽車は注文通り悠々として歩いたが、然も雨又雨、雲又雲、白日の車中、夜行汽車と一般、車窓の外、只だ茫々、漠々のみ。

沼津にて靜岡支局の小杉君來り、相伴うて江尻驛に下れば、鐵舟寺の和尚さんも

迎に來て呉れた。然も篠つく雨にて、富士山が、何處の方角にあるやら、僅かに身を自動車に託して、漸く鐵舟寺にたどり付いた。富士見村と云ふも、今日は全く富士見ず村だ。但だ佛心饒かなる和尚の好意と、庭前の躑躅花が雨を帶んで滿開しあるに、聊か氣を降した。而して一同豌豆飯にて滿腹し、雨聲の中に熟睡した。偶ま夢破るれば、大雨沛然、屋を洗ひ去るの勢だ。やがて起き出づれば、雨は止んだが、天氣は未だはつきりせぬ、僅かに三保の尖端を隔てゝ薩埵嶺の一角に見るのみ、富士山は今尚ほ重霧濃雲の裡に埋れてゐる。

本日は此れから久能山にでも登ることゝしようと、それ〴〵支度最中である。天氣都合では三保松原を逍遙する筈。而して是非富士山と相見る迄は、此の鐵舟寺に滯在する決心である。（大正十二年五月四日午前八時、駿州清水鐵舟寺に於て。）

富士見廻遊

五月四日、午前十時頃迄は、怪しき天候、人をして一喜一憂せしめた。靜岡方面には青空が見えた、清水湊方面は、黑雲が渦卷いてゐる。鐵舟寺の庭には、所謂る狐の嫁入りと稱する日照り雨が降る。然も十時過ぐる頃から、黑雲は太平洋の彼方へ推しやられ、やがて一天青空となつた。

十時半頃から久能街道を快駛した。豌豆は既に收納を了りてゐる。胡瓜は黃なる花を著けてゐる。石垣に叢生したる苺は紅く熟してゐる。赤茄子も青く實りつゝある。此邊隨處に促成野菜畑たらざるはなし。途中にて出會する荷車は、何れも苺の箱を滿載してゐる。

久能山には樟が赭き芽を吹いてゐる。あらゆる小鳥が啼いてゐる。例の如く社務所に寄り、東照宮に玉串を献げ、奥の廟所を拜した。予は德川氏の舊臣でも何でもない、併し史家として家康には、隨分緣故なきにあらずだ。予の家康に就て記したる所は、予一個としては公平、允當のつもりである。併し家康當人に語らし

めたら、あゝでもない、かうでもないと、必らず申譯をするであらう。家康を愛すると、愛せぬとは、銘々の勝手だ。併し彼は實に日本の誇る可き偉人の一人である。

寶物館に入りて、家康の手廻り諸道具の類を見る。鉛筆やら、西曆一五八一年、西班牙マドリッド府製の鐵製時計や、鼻目鏡の類を見る。此の鼻目鏡は、後藤子爵が卽今使用しつゝあるものと大差ない。但だ此れは其輪飴色の鼈甲にして、其の球がやゝ小形である。予は前回見るを得なかつた家康の座右本『和劑局方』を手にするを得たるを悅ぶ。此書は朝鮮の小字型活版だ。其の表裝も原形の儘にして、表皮の題字も、朝鮮人の手筆であり、卷末には朝鮮人の藏書印がある。恐らくは壬辰役の戰利品であらう。凡そ家康の藏書中にて其の過半は朝鮮本であつたとは、家康の死後、尾州義直、紀州賴宣、水戸賴房の三家に分配したる書籍目錄に徵しても知る可しだ。

此れから車首を廻らし、三保に赴いた。而して鐵舟寺の前を突過し、清水、江尻から舊東海道の松並木を過ぎ、故井上世外侯の銅像を禮して、興津清見寺に至つた。古川大航和尙は、感冒の氣味にて勝れずあつたが、疾を力めて接待せられた。大方丈後の庭には、若葉青葉の間に、躑躅花が、今を盛りと咲いてゐた。宗演老師が、先住眞淨和尙を弔して、靑幛如燃躑躅花と詠じたる句を、大航和尙と相語りて、轉た黯然たらしめた。予は返すがへすも大航和尙が、先師思ひに感心する者だ。而して今や眞淨和尙を弔したる宗演老師も亦た亡き數に入つた。

斯くて潮音閣に上り、飽く迄三保の松原を眺め、種々の寺寶を拜覽した。家康自筆の能番付、及び其の日課の細字六字名號の聯記、秀吉の北條征伐に際して、寺鐘の借用證文、春日局の大輝和尙に與へたる書翰、雪舟の淸見寺景を、肥後の杉谷行直の摸寫したるもの等、枚擧に遑あらなかつた。

五月三日は八十八夜だ。此日に摘み、此日に製したる茶を喫めば、中風を煩ふ虞

なしと云ふ。予等は三日鐵舟寺に到著するや否や、當日雨天に拘らず、製したる最新茶を喫んだ。清見寺でも、亦た同じく此茶を喫した。而して更らに古川師より一鑵を頒與せられた。駿河は實に茶の國だ。何處に之いても、茶の香りが好い、何處で喫む茶も、味がよい。

鐘樓に上りて、秀吉借用證文の鐘を見た。鐘銘の文字は磨滅してゐるが、正和の年號は隱々見る可し。山門にて和尚と再訪を約して別れた。

此日は富士を飽く迄見た、食傷する程見た。富士見村から見た、久能街道から見た。三保から見た。清水から見た、東海道の老松の並木の間から見た。前日の遺憾を償うて餘りある程見た。而して午後四時過ぎ歸來、鐵舟寺の層樓の上から又た見た。幾回見ても厭ふを覺えぬは只だ此の靈山だ。

（大正十二年五月五日午前六時、駿州鐵舟寺に於て。）

美保灣舟遊

五月五日、快晴、始めて鐵舟寺層樓から日出を見る。昨年十一月、此處に遊びし際、和尚に勸られて一泊し、朝寒を冒して、旭光の東海に出て、富士山に反射する美觀を眺めんと起き出でたが、曉霧に妨げられて果さなかつた。然るに今朝は、正しく當時の遺憾を霽らすことを得た。

最初には卵色の曙光、美保灣の上を抹した。やがて黃橙色となつた。須臾にして薔薇色となつた。而して旭日は、海上より舞臺のせり上げの如くせり上げ、四半片から半片となり、遂ひに全輪となりて、赫灼の光輝を發射した。而してそれが富士山の白雪に反射して、何とも名狀し難き妙光、靈彩を呈した。

朝から寺背の山に上り、觀音堂に詣した。此處の展望も亦た妙だ。斯くて野徑を辿り、茶の香を嗅ぎつゝ清水湊に赴き、二艘の小舟に分乘して、巴川を下り、美

保灣に入つた。此れは網打たせんが爲めだ。當初は釣舟をと考へたが、釣の季節がやゝ早き爲め、寧ろ網舟を擇んだ。同行は江尻通信社の若林君を東道とし、吾社の坂部君、靜岡支局の小杉君、販賣の江崎君、及び我等一行五人であつた。

先づ羽衣橋附近から、そろ〳〵網を投じ、それから漸次に下りて、清水湊の汽船の繫碇所の邊に至つた。而して更らに上りて、又た羽衣橋の上に至つた。魚は中々獲れた。尺餘の黑鯛やら、鰤やら、舟の生洲に跳り撥ねつゝある。日はかんかん上から照り付け、風はそよ〳〵と水面を渡り來り、如何にも快適の日光浴をした。

それよりも快適は、舟上からの富士山の眺めであつた。若し予にして北齋の靈腕があつたならば、舟上の午前十時過ぎから、午後三時前迄に、富士百景を描くことは、決して難くなかつた。百景は愚ろか、千態萬狀、其の雲烟の倏來倏去、殆んど寸時も定態無きを覺えしめた。富士山は依然たる富士山なれども、其の四邊の光景の變化と、我が位置の變化とによりて、山其物の活動息むなきを覺えしめた。潮は追々と干てきた、淺洲は處々に現はれ出でた。予等は舟を繫いで、砂嘴の上に、貝を撈つた。此れは獲る所多くなかつた、そは獲んことを勗めなかつたからだ。

美保灣は海苔の產地であり、牡蠣の產地であり、あさり貝の產地であり、而して黑鯛、鰤、鱸等魚族の產地である。然も今や此の方面に築港出で來り、其の岸壁には、二萬噸級の船を横附にする計畫と云へば、今日の如き快遊も、將來は繰り返し難からむ。遊客たる予等としては、惜しき限りなれども、清水湊繁榮の爲めに、亦た悅ぶ可き事である。但だ如何に美保灣、及び其の附近の水陸に變化を來たすも、富士山の位置には、變化無かる可し。此丈は安心だ。

再び野徑を辿りて、鐵舟寺に還らんとすれば、一群の青年、予等を途中に待ち受け、其の長とも覺えたる一翁、御身は德富先生ならずやと云ふ。予は問はずして

其人は、庵原郡報德社の秋山青溪君にして、其の青年達は、興津及び其の附近の人々たるを知つた。諸君は秋山君を主として、我が成簀堂叢書の紀平洲先生の小語を購求し、それを會讀しつゝありと云ふ。秋山君は獨身二十五年、報德社の爲めに、一身を獻ぐる篤志者だ。青年諸君亦た質實剛健、愛す可し。乃ち諸君と相ひ伴ひ、鐵舟寺にて小話し。更らに予等は清水の長陽館に赴き、我が同業諸君と興に、朝陽館にて晩餐を共にした。予は此序に於て、靜岡縣の國民會諸君が、子の還曆を祝す可く、江崎君を代表として、其の名產の什器を携へ贈られたるを感謝す。午後九時頃、鐵舟寺に還れば、興津の青年諸君猶ほ在り、頻りに墨を磨りつゝあつた。此れは云ふ迄もなく、予が五月六日朝の課業の原料である。這回予は一切揮毫を謝絕する積りであつたが、然も青年諸君の熱心に對しては、悅んで其禁を破らざるを得なかつた。（大正十二年五月六日午前五時半、駿州鐵舟寺に於て）

鐵舟寺より靜岡

五月六日富士山と共に起き出でた。共にと云へば富士山の方では、不服であらう。但だ旭光の色は、昨朝程に鮮麗ではなかつた。

朝飯前の仕事とは云ひながら、興津青年諸氏其他の爲めに、澤山揮毫した。前日墨を成る可く濃くと、青年諸氏に注文して置いたから、諸氏は三梃の墨を、磨り潰したと云ふ。濃いのは感心だが、それが餘りに多かつたのには閉口した。漸く墨汁が盡きたと思うて、一息ついたら、別に又た丼鉢に一杯あつた。

此れから龍華寺に赴いた。途中にて夏蜜柑を買つた。枝が垂るゝ許りに實りたる、鴕鳥の卵よりも大なる夏蜜柑をもぎ採るのは、如何にも痛快であつた。一圓で二十個、到底持ちきれなかつた。

最早富士山にも飽き足りたれば、何も心に殘すものはなく、鐵舟寺の和尙さんに

再訪を約して去つた。和尚さんは草餅を作りて、我行を送つた。離酒の代りに離餅が出來た。道は久能街道を過ぎた。此行久能街道を駛る既に三回。幾回通過しても、此の街道は面白い。殊に當日は風ありて、太平洋の巨濤が沙濱に推し寄せ來る勢ひは、凄くもあり、壯でもあつた。

靜岡大東館にて晝食し、法月君の案内にて、寶臺院に赴いた。法月君は小杉支局長の友人にて、好事家だ。寶臺院は二代將軍秀忠の生母、西郷局の靈屋ありて、從來御朱印寺であつた。此處に耶蘇地藏と稱する石燈籠がある。燈籠の竿石がやや十字架になり、而して其の前面に、異形の人を浮彫にしてある。其の服裝から容貌が、天主教の聖徒其物らしく思はるゝ。尙ほ靜岡市の或人の庭園にも、略ば同一の燈籠がありと云ふ。庭には花菖蒲が滿開であつた。古文書が澤山あつた。何れも德川初期のものだ。

大東館を出づる頃から風は變じて、雨となつた。寶臺院を出づる頃には、やゝほん降と云ふ可き程になつた。我等は一氣呵成に阿倍川を渡りて、東海道を突進した。宛も身は廣重畫中の人となつた。此邊は舊時の東海道の面影が、その儘に殘つてゐる。道を挾むの松並木は、或は仰ぎ、或は俯し、道は蛇の如くうねりくねりて、道邊小山の頂上迄、茶畑が茂り、道傍の茅屋には野薔薇や、躑躅花が咲き出てゐる。而して道上には皮羽著けたる商人や、蓑笠の百姓や、如何にも廣重の板畫から、拔け出して來た樣な風情だ。

予等は宇都の谷の隧道口迄來り、更らに車首を廻らして、宗長法師の故跡吐月峰柴屋寺を訪うた。寺と云ふよりも、寧ろ庵と云ふ可きである。小なれども幽だ。庭の外には數百竿の竹林がある。庭には楓樹あり、泉水あり、而して天柱峰は庭の築山とも見る可く、其上に聳えてゐる。和尚亦た我が國民新聞の愛讀者にして、既に予が鐵舟寺からの第一信を讀んでゐた。予は烟草に緣なければ、吐月峰の灰吹も、役に立たず。記念に筆筒を購うた。高橋君は竹杖を購うた。杖道樂も

追々と高橋君に讓らねばなるまい。後生畏る可しとは、此の事であらう。因に云ふ、寺の寶物棚には、細川幽齋の文臺や、野田大塊の蘭があつた。大塊翁も、生前幽齋公と同一の待遇を受くるのは、冥加至極であらう。大塊翁宜しくおごる可しだ。

此れから斜風細雨の裡を駛りて、阿倍川を過ぎ、車を停めて所謂る阿倍川餅を購うた。此餅には予も緣故淺からずだ。予は少年の頃、高足駄にて、東海道を上下したこと三回。何時も此の阿倍川餅を喫した。今更ら之を試みて、坐ろに舊時の味を懷ひ出した。

淺間神社の前から遙拜して、臨濟寺を訪うた。清隱老和尚も、此の雨中晩景の來客には、聊か驚いたであらう。何時來ても點塵なく、掃除の行き屆きたるには感心だ。和尚も既に國民新聞紙上に於て、予の消息を讀みゐられた。富士山が出で來る迄は、決して鐵舟寺を去らぬと、予が放言した言など語り出られた。雨中の禪庭は、又た別樣の趣きがある。特に方丈の上に聳ゆる茶室からの眺めは、一層だ。滿山の新綠が、雨に濕うて、其色染むるが如く、而して山躑躅が其間に點綴する、此に至りて雨も亦た、愛す可きだ。敢て負け惜みを云ふではない。

（大正十二年五月七日午時六時、今日も亦た曇る。雨でも、風でも、最早見るものは見たから、此上は頓著ない。靜岡大東館に於て。）

靜岡より東京

五月七日、大東館に於て、餘儀なき揮毫をした。斯くて小杉、法月兩君の案内にて、師範學校に赴き、圖書の見物をした。予は先年夜中提燈をつけて、亂冊堆裡より抽出し、其の一斑を見て、珍書の多きに驚いたことがあつた。敢て予自ら僭して、珍書を發見したと云ふではない。併し當局者に自覺を促がした事には、聊か興りて力ありと信ずる。

學校にて奥平校長、南陸軍大佐、高部教頭等に面し、一通り瞥觀した。漢籍の珍なるは、慨して林家の恩賜本だ。此れは明暦三年の大火に、林家の書庫が燒失したから、幕府より殊に金を賜うて、道春の相續者弘文院學士、林春齋に之を購はしめた物だ。毎冊の卷首恩賜官本、林氏藏書、向陽軒等の印あり。或は弘文院學士の印記のあるのも、まゝ見受けた。此れは概して月並以上の書である。中にも明の正德板の止齋集の如き、同嘉靖板の釣臺集の如き、先づ珍本と云ふ可きであらう。特に予の眼を驚かしたのは、慶長勅版の論語を見出したことであつた。此れは澁江余善の舊儲だ。眞に珍本中の珍本であつた。恐らくは是れ靜岡師範學校藏書中漢籍の白眉であらう。

其他寫本にも、少からざる珍書と云はんよりも、有要書があつた。其中でも德川將軍家以下の諸系圖の如き、寛政重修諸家譜とは、全く別本にて、其の精確如何は得て知る可らざるも、簡にして要を得てゐる。又た戸田氏德等の編輯にかゝる記錄解題があつた。此れは歴史家には、極めて必要の書と覺えた。既に續史籍集覽の中に、同人編輯の番外雜書解題は、印刷せられてゐる。されば是非此の記錄解題も、印刷して貰ひたきものである。又た大槻磐水先生等が、官命を奉じて記述したる、大部の厚生新編がある。此れは先づ百科全書と云ふ可きものだ。此れは役には立たぬが、當時に於ける海外知識移入の程度を見る可き、好個の資料だと思ふ。

歐字書中にも、可なり面白きものがあつた。和蘭文のゴロウニンの日本幽囚記があつた。予も一八一八年出版の、英文同書を所藏するが、靜岡本には、頭首に高田屋嘉兵衞の肖像が出てゐた。其他奈翁大帝の命によりて出來したる漢、佛、拉丁の對譯大字書もあつた。

それから輸出茶の精製所を見物し、浮月樓にて、小杉君の馳走に預つた。樓の主人が予に字を求めたから、『不レ止二人樂一、魚亦樂。滿池碧水菖蒲香。』と認めた。

此れは實景だ。人は陸上にありて、飯を喫し、鯉は池中に群りて麩を喫す。人でも魚でも滿腹すれば、愉快になる。大人でも小兒でも滿腹すれば、不平が無くなる。皆無とならざる迄も、減少するには相違ない。

來時の緩行汽車に引き代へ、歸時には特急を擇んだ。車中には九州より還り來れる、鎌田文相が在つた。熊本の話を聞きつゝある間に、岳麓は何時の間にやら、過ぎ去つた。沼津では古澤郡長や、二三の友人に面會した。大森に還りて荷物を披けば、夏蜜柑や、蒲鉾や、新茶や、阿倍川餅の類が出でた。而して又た小杉君が撮りたる、美保灣頭打魚船の寫眞が數枚あつた。此行僅かに五日、然も何となく新たなる元氣が出で來つた如くに感じた。いざ此れから又修史の筆を執らん哉。（大正十二年五月八日午後一時、大森山王艸堂に於て。）

岳麓たより

本年の富士裾野に於ける、國民新聞主催の野營大會は、少くとも昨年に比すれば、倍の好成績だとは、予が屢ば受取つた報告である。而して過日は、賀陽宮殿下の御視察ありて、一層の光榮を添うした。予も是非一度は、親しく其の模樣を見聞したく思うたが、漸く昨十四日（大正十三年八月）其の機會を得た。

途中畑作などは、旱魃の爲めに、半ば枯死し、稻は未だ穗を出さぬに、其葉黃みつゝあるを見受けた。御殿場にて、堀田野營大會主任、伊藤靜岡縣青年團副團長、青龍寺崇嶺和尙、其の他青年諸君に出迎へられ、相伴うて青龍寺に至る。途中橋梁など新修せられ、若しくはせられつゝあり。神社の石鳥居など、折れ倒れたるまゝのものあり。昨年九月一日に於ける、震災の痕、尙ほ處々に存す。但だ此邊水潤澤にして、田は豐作だ。

青龍寺の裏門に近けば、屋を繞るの淸流は依然たり。墻に傍ふの萩花は依然たり。寺の內外殆んど其の舊觀を改めず。但だ奧座敷の側に見えたる、水車が無くな

り、其の縁側にある一列の萩花が、約三尺許りも、距離が出來たるのみ。此れは萩株ぐるみ地盤が、すべつたものだ。家も同樣にすべつたが、今は恢復せられた。斯く恢復の功を奏したる、崇嶺和尚、及び其の門徒の努力、想ふ可し。

午後から瀧河原廠舍に赴く。富士の裾野の光景は、何時もながら人間を靈化する。撫子、擬寶珠、其他の野花、今を盛りと咲いてゐる。偶ま白野薔薇の殘花がある。廠舍に至れば、國民新聞の旗は、高く半空に飜つてゐる。堀田主任は、六臂、八面、應酬に暇なし。教導主任出口少佐、松井曹長等と相見る。而して岩倉聯隊長、及び參謀本部より出張したる、島本大尉等と相語る。西瓜の御馳走に預る。此日陰雲富士全山を封じて、身は山麓にありて山を見ず。而して霧は飛絮の如く、濛々として人の衣袂を襲ふ。此の濛々が、東京では車埃、馬塵だが、此地に於ては靈山淸淑の氣が、凝集したるもの。自から怡悅するには餘りありて、持して都門の諸君子に贈る能はざるを憾む。

予は昨夜來登山の會員諸君の下り來るを待つて、一場の講話をした。此れは餘りに會員諸氏の、勇ましき活動振りを見て、中心欣快に堪へず、自から奮うて諸君と相語つたのだ。語りたる所、何事ぞ。大抵心ある讀者諸君は洞察せられむ。

同夜は堀田、伊藤兩君は、青龍寺所在地高根村に於ける、講演會に臨む約束ありたれば、更らに薄暮相ひ伴うて、青龍寺に返つた。

青龍寺には蚊が居ないと云ひたいけれども、少いと云うた方が確實だ。同行の長子と末子とは、蚊帳なしに寢ねた。大森山王草堂の蚊帳の內よりも、凌ぎよいと云うてゐる。團扇の必要は勿論ない。用意せられたる平野水さへも、其儘にしてある。眞に淸冷の氣、人に薄つてゐる。萬籟靜寂、唯だ泉流の音のみを聞いて、夢も亦た久し振りに圓であつた。（大正十三年八月十五日午前六時　岳麓青龍寺に於て。）

山中湖と河口湖

八月十五日、木魚の響と、泉聲とにて起き出で來る。先づ窓下の萩花に對して、破顔一笑。

朝餐前、浴衣掛けにて、山門の萩花のとんねるを出て、稻田の間を逍遙し、翠杉の杜ある邊に至る。卽ち日蓮宗の蓮靜寺だ。此處にも朝勤の最中らしく、誦經に和して木魚が鳴つてゐる。門前の大石碑には、寶曆の年號あり、門內の石燈籠は、何れも元祿の年號がある。家根の上には、撫子の花や、其他の夏草が叢生し、中には灌木もある。眞に蒼然たる古色だ。

同行の兩兒は、未だ山中湖、河口湖の勝を見ざれば、我等老夫婦は、其の案內旁た出掛けた。但だ殘念であつたのは、御殿場の富士、瀧河原の富士、靑龍寺の富士など、宛も我物顏に誇り唱へたる富士山が、昨日以來、一向に顏を出さぬことだ。今朝も四山雲開いて、晴色遠きより至るも、唯だ富士山のみは、白雲に封せられてゐる。

御殿場から須走迄は、攝政宮殿下の登山道路なれば、眞に砥の如くある。須走から籠坂峠も、概して道路の修繕は出來てゐる。秋花秋草は、昨年の震災を忘れたる顏して、咲き茂り亂れてゐる。息をつく間もなく頂上に至りて、山中湖を望む。相ひ換らず絕景だ。峠を下りて山中湖畔に出で、暫らく徘徊す。此邊家々養蠶最中だ。ダリヤの花も今が眞つ盛りだ。

野路を奔りて吉田の淺間神社の參道前に至る。鬱然たる老杉が、行儀宜く一町餘り双方に立ち列び、復た其側に燈籠が立ち列んでゐる。此れが北口の富士登山道の始まりだ。老杉の間を行けば、丹塗りの大鳥居がある。其の扁額には、日本一とある。鳥居を入れば、左方に大なる公孫樹がある。拜殿の前なる右方には、二株の老檜が、並び立ちてゐる。其の根元に於て相ひ合し、又た其の兩幹の上部に於て相ひ合し、然も中間だけは、依然二株である。眞に奇觀だ。左方には巨杉がある。此れは一株にて、兩株の老檜に對抗するに十分だ。其の揭示に曰く、高

さ百三十尺、廻り三十一尺、根廻り七十五尺、樹齢一千二百年と。此の樹齢は、何によりて測定したるやを詳にせず。併し兎に角國寶の一に數ふ可きであらう。

季節やゝ過ぎたれども、登山客は、尚ほ若干あるを見受く。

河口湖邊に至れば、村娘野孃、盛装して往來するもの多し。此れは當日此邊の盆であつた爲めであらう。予等は舟にて直ちに湖を一周した。湖上に於ける富士の眺めは、日本第一の評がある。現に國民新聞にて、日本風景寫眞を、募集したる際にも、入賞した程であつた。然るに當日は只だ此の富士山のみが、全く顔を見せなかつた。能くも山靈の御機嫌を損じたものと思ふ。予が韓退之であれば—彼は自ら衡岳の雲を開いたと云うた—此の雲を開くの神通力ある可きに、悲哉凡夫だ。

併し湖上の眺めは、富士山なきも尚ほ可なりだ。予等は湖中の小嶼鵜島に上陸した。此れは袖に入る可き程のもの、然も滿地樹木繁茂してゐる。頂上の辨天祠に詣す。先年攝政宮殿下にも、此の頂上から湖景を縱覽遊されたる由にて、御座所の趾がある。標木あり曰く、海拔二千八百十七尺五寸四分と。五寸四分とは、如何にも念の入たものである。

一周の後、昨年の縁をたどりて、河口ホテルにて午餐す。午餐と云ふも、既に三時に近かつた。鯰のフライ、鯉の洗、鯉濃汁等にて、何れも滿腹した。湖中の鯉魚は、時に或は二貫目に垂んとするものあり、概して六七百目のものを釣る。又た鯰も地震の原動力となる程ではないが、隨分巨大のものがある。鯉を釣るには、竿を巖上に立てゝ、鯉がかゝれば、竿は自然に巖を離れて、水中に入る仕組となつてゐる。それを見張りして、直ちに舟にて竿の流るゝ所を尋ね、徐ろに釣絲を手繰り、鯉が水面に近けば、手網にて、撈ひあぐる趣向だ。

いざ勘定となれば、主人は昨年先生が書いて呉れたから、お客が追々やつて來た。その御禮の印として、御馳走すると云ふ。予も實に閉口した。別に河口ホテルの

提灯を持つたのでもなんでもなかつた。押問答の末、到底受け取らぬから、予は茶代として若干殘し置た。然るに主人は、亦たしも舟迄やつて來て、此れは餘りに多いと、遂ひに茶代の半額を還した。大正時代の奇談なれば、掲げて置く。

歸途は籠坂峠の彼處此處にて、手に餘る程の秋草、秋花を採集した。此れは山王草堂に移植す可き爲である。それから御殿場停車場迄、長男の逗子に還るを送り、予等が青龍寺に還つたのは、薄暮であつた。門を入れば、朝來の雲は、遂ひに雨となりて降り出した。（大正十三年八月十六日朝、青龍寺に於て。）

青龍寺より大森まで

八月十五日は、珍らしくも青龍寺の奥座敷に、雨聲を聞きつゝ、兩脚を十二分に伸ばして眠つた。

十六日も定めて雨降らんと思うたが、起き出づれば、宿雲既に霽れて、滿庭の萩花は、夜雨に潤ひ、何れも欣々然、紫房、綠葉兩ながら滴らんとす。

扨ては今朝こそ富士山の眞面目を見んと樂んだが、生憎く雲はこの方面のみ、未だ散じ盡さず、徂徠してゐる。偶ま絶頂が露はれんとすれば、八合目以下は封せられ、偶ま半腹が出でんとすれば、絶頂が掩はれ、やがて全山密封し了らる。能く能く富士山に緣のなきことよ。

昨夜は青龍寺附近の知人達より、餅や蕎麥の到來物ありて、晩餐は賑ぎ合うた。今朝は文官試驗準備の爲め、青龍寺在寓の大學卒業生諸君が、磨り溜めたる墨汁や、用意の絹素など出し、いざ揮毫と要められた。此れには和尚始め、幾許の黒幕があるは勿論だ。大字、中字、小字さま〳〵書いた。墨汁の澤山なのには閉口した。それもその筈だ、諸君は一晝夜半の力を勞したと云うた。伊藤靜岡縣青年團副長が、特に捺印の勞に服せられたるは、尤も感謝す可し。

芙蓉岳麓青龍寺。　流水濺濺度竹林。

不レ待安禪閑作用。　滿窓清籟洗二吾襟一。

此れは予が卽興を賦して、崇嶺和尙に貽りたるもの。和尙別に昨年の詩を書せんことを需めらる。予曰く、既に忘れたり。然も拔目なき和尙は、昨年八月の國民新聞切り拔きを突き付けた。此に於て頭を搔き〳〵、更らに管を搦つた。

既記の如く、此邊は水が潤澤にて、稻株も例年より成長よし。寺から里への諺通り、和尙より茄子とか、蕃椒とか、種々の野菜を、土產物にと贈られた。吾妻の袋は、宛も舌切雀の宿を訪うた、慾張婆の荷物の如く膨脹した。それに前日籠坂峠より採拾したる秋花、秋草や、靑龍寺から請ひ受けたる竹や、花の苗等にて、隨分嵩張つた。

此行は靑龍寺にある、唯だ一日兩夜のみ。されど眞に涼しかつた。富士山を見なかつたのは、如何にも殘念なれども、斯身さへ健全なれば、富士山の紛失する心配は、當分あるまじ。河口湖まで行いて、精進湖を見落したのは、殘念だが、此れは來年の樂として、取つて置くことゝした。僅か一日にて頭の洗濯は、全く出來た。此上はバラックの裡、殘暑と戰ふ元氣は、更らに旺盛だ。

御殿場にて靑龍寺和尙、遠州日坂の伊藤君、及び靑龍寺附近の諸有志の方々と、來年を約して、相ひ別れた。靑龍寺は震災後、あらかた復興したが、其の復興は、未だ十分ではない。斯る名藍を、此儘にして置くは惜しきもの。伊藤君の如きは、率先して力瘤を入れてゐる。江湖有緣の君子は、必らず其力を假す所あらむ。予は和尙に代りて、此段願ひ置く。

車中にて、偶然吾社山中鹽君が、令夫人と共に、沼津避暑旅行からの歸途に出會した。突然予等が此の場面に舞込んだのは、如何にも心外千萬だ。併し詮方なければ、予等は成る可く遠方に陣取つた。

途中には驟雨があつた。されど大森の山王草堂附近は、殆んど其の痕跡だになかつた。晩餐の際に、聊か食慾が減じたやに覺えたが、實は山北國府津間にて、鮎

鮓三人前平げ盡したことを想起して、自から惑を解いた。

（大正十三年八月十七日　大森山王草堂に於て。）

野營大會の成功は、決して區々國民新聞社の爲めでない。眞に國家の慶事と信ずる。

嶽麓三日遊記

一　御殿場より吉田

過日堀内良平君から、都合の善き折に、富士山麓を案内せんとの話があつた。予には山中湖、河口湖は舊朋であるが、他は未見だ。渡りに船とは此事であらう、欣諾、快諾、老妻と與に、大正十四年十月廿一日、午前五時半、大森草堂を出掛けた。珍らしく品海の旭日を、省線電車の中から眺めた。眞に美觀であつた、而して今日の好晴を卜せしめた。

品川驛にて堀内君の乘りたる汽車を待ち受け、相共に御殿場に至つた。箱根山中の秋は、漸く酣ならんとしつゝあつた。御殿場から籠坂峠迄は、熟路ではあるが、滿目の秋光、我が吟思を高調せしめた。此邊隨處野菊尤も多し、何れも白きもの、遠望すれば白布を晒らしたる趣きがある。但だ遺憾と云へば、富士山が、全身を隱して、出で來らぬことだ。而して天氣模樣も、時々曇りて、天の一角には入道雲さへ生じた。

予は籠坂峠の大觀を愛す。往くも返るも、此の峠の眺めは妙だ。甲州路からすれば、駿河、伊豆、相模の近景、遠景を、脚下に見、駿河路よりすれば、山中湖を眼前に見る。山中湖は五湖中の最高地點を占むるも、如何にも明媚、開豁にして、凄味がない。此邊に帝大が二十萬坪の地を獲、本年の夏から、其の若干の地ならしをしてゐる。而して此の湖を環りて、後藤子の少年聯盟や、各大學が、鉛々占め來る地積は莫大だと云ふ。惟ふに此の附近に大學村を現出するも、遠きにあら

ざる可き歟。

吉田の淺間神社に參詣し、神殿の側にて中食をした。信玄の古文書や、秋元家奉納の太刀や、神寶を觀た。併し吉田神社の神寶は、神殿の前に聳ゆる神木杉と、相生杉であらう。神木杉は高さ百三十二尺、太さ目通り三十一尺、根廻り七十五尺。實に杉中の王だ。相生杉は其實檜樹である。而して二株と云ふも、三株連接してゐる。此れも神木杉にやゝ次ぐ程の老樹だ。愛す可き老樹よ。

記者は老樹の禮讃者だ。喬木故國を識る。老樹は樹自身の古さ歴史を物語るのみでなく、それに聯引する數多の歴史を語る。此の老樹の如きも、氏康、氏政討滅の祈願文を捧げた信玄が、神殿の前に跪拜したのを、目擊したであらう。

轉じて祠堂後の小丘に上る。此れは日本武尊が、富士を遙拜せられたる所とて、大塚と稱してゐる。名の如く古墳らしく思はる。丘上から見れば、一帶の老赤松に、蔦が紅葉して、得も云はれぬ風情がある。此れを諏訪の森と云ふ。一時此の老赤松は、拂下げて、既に斬伐の厄に罹らんとしたが、吉田の有志者の運動にて、中止せられたと云ふ。而して此れは當然社領であつたから、神社に屬す可きものとて、その古文書寫なども示された。所有者の誰なるかは別として、此の森林は國寶であれば、當然保存す可きものであらう。

二　吉田より精進湖

吉田神社を發したのは、午後一時過ぎであつた。それから河口湖に至り、船にて河口湖を過ぎた。曾て國民新聞で、全國から風景の投票を募りたるに、河口湖から富士を望むを隨一とした。然るに生憎富士は、頑然として其の片鱗さへも露はさない。吉田松陰は、阿蘇山が、雲に隱れて出で來らぬを見て、此の英雄漢を畏避したと、詩を作つて阿蘇山を嘲たが、記者にはそれ程の自信力もない。併し富士を拔にしても、河口湖上の眺めは、決して惡しくない。殊に湖中の小嶼鵜の島の翠松と、白き野菊と、紅葉とは、水に映じて、點綴の妙を極めてゐた。

長濱村に上陸して、だら〳〵阪を上り、トンネルを出づれば、西湖だ。天氣模樣が、愈よ面白くないから、傘を借用して船に上つた。西湖はとても支那の西湖には敵はない。併し其の湖畔の炭燒竈から烟の立つを見れば、何となく深山の心地がする。四山は紅葉に尙ほ早いが、然も黄葉は斑々として、碧樹の間に錯りてゐる。賴ひに傘も必要なかつたから、船に殘して根坂に上陸すれば、小學生の男女、手に手に紅葉を持ちつゝ、此方を目懸けて走り來りつゝある。

待ち合せたる自動車に乘れば、未だ一丁目を行かざるに、乍ちパンクした。イザ見物人よ。村の小供や、婦人や、若者迄、自動車を圍んで、とても仕事が出來ぬ程だ。約十五分を修理に費し、所謂る樹海なる青木原に分け入つた。此處は今や紅葉の季節だ。富士より流出したる熔岩の上に、苔が生じ、その苔の重なりたる上に、種々の濶葉樹や、針葉樹を生じ、實に比類罕なる一大原生林をなしてゐる。此中には所謂る御殿庭などもある。御殿庭とは、熔岩が面白く並び、その上に樹木が面白く排置せられてゐる。宛も人造庭の如くに。併しそれは物の數かは、見る可きは、樹海其れ自身だ。

精進湖より亦た小艇に乘り、精進ホテルに向ふ。湖中南岸の斗出したる岬の上、老樹の中に白壁の聳ゆるもの卽ち是れ。艇上雨點兩三。ホテルの人々に迎られ、急阪を上りて、先づ客室に入り、取り敢へず大なるストーヴに薪をくべ、熱き紅茶を喫したる心地は、我等ならで知る者はあるまい。

實は一泊して東京に還るつもりであつたが、堀内君のせめて二泊との勸めもあり、それよりも餘りに此の景色と、此のホテルが氣に入つたから、直ちに紅茶の半盞を喫するや、電報用紙に二十四日返るとの電報を認めた。豫定を變更するとは、記者に取りては、よく〳〵の事である。

我等の室は、窓外三尺、老松と接し、松を隔てゝ精進湖に臨む。而して湖を隔て樹海であり、その上が富士山である。夜來、雲破れて漸く其の肩から半身を現

はした。

善意に解すれば、富士も折角の珍客だけに、せめて此丈けでもとの申譯けであつたかも知れぬ。晩餐には十和田湖から移殖したる本栖湖の姫鱒が、卓に上つた。ホテルの夫人から、明日鱒釣は如何と誘はれたが、それには自信がなかつたから、辭退した。

（大正十四年十月廿三日午前六時半、精進ホテルの一室にて。昨夜小雨、今朝白霧模糊、聊か冷氣を覺ゆ。）

二十一日與謝野寛君、來社の際、近刊明星を齎らし贈られた。曾見するに、卷首には戸川秋骨君の精進行の一文がある。是れ天我に案内記を惠むものと、早速携へ來りて、汽車中にて一讀した。流石に秋骨君らしき書き振りにて、面白かつた。

三　本栖湖の姫鱒釣

十月廿三日、今朝はパノラマ臺に赴く豫定であつたが、天氣都合が面白くない。ホテルの人々も、折角出掛けても、雲霧四圍を封じ込めては、致方あるまいとの言に任せ、寧ろそれでは本栖湖に、姫鱒釣にと、方向を一轉した。固より釣魚が目的ではない。

精進湖から本栖湖の間は、約一里餘と云ふ。亂山高下、一路黄樹、紅葉の林を穿つて行く。笈の峠に至れば、青木原なる樹海を、脚下に瞰る。滿眼の黄葉の中に、紅葉を點綴す。此邊楢、栗尤も多し。此の道路は、中央線の出で來る以前は、沼津から甲府へ生魚を運んだる往還であつたと云ふ。やがて城山の麓を廻れば、本栖湖に出づ。城山の麓には、尚ほ殘壘がある、舊時の關址らしい。

本栖は武田時代には、本栖千軒と稱した由であるが、今は四十戸の一部落である。家根には筋違ひに十字の木を並べてある。湖畔に出で、舟を浮べて、漕ぎ出す。天候頗る怪しく、雨も二三點降る。湖岸は熔岩にて、湖水は深澄にして、濃藍色をなす。古人の所謂る碧瀾寸々皆な秋色とは、此れであらう。此處の姫鱒は、既記の如く、十和田湖から移殖したるもの。今やホテルの食膳に於ける、殆んど唯

一の佳肴である。

本栖湖は、山中、河口に比して、小なるも、其の最深は百三十二米に達すと云ふ。姫鱒は思ふ程竿に上らざりしも、全く無收獲でもなかつた。中には釣落して、口惜しがりたる者もあつた。

予は釣よりも景色にあこがれてゐたが、やがて雲散じて、四圍の丹崖、碧樹出で來り、更らに一段の光景を添へた。

白雪紅樹擁二湖端一。　落葉埋レ蹊露未レ乾。
不レ恨秋空無二定態一。　雨奇晴好一時看。

全く此の通りだ。追々午時を過ぎたれば、舟を廻して、歸途に就く。乍ち雲破れて、富士山が、其の絶頂と麓を現はした。而して中間の横雲亦た、別樣の趣を加へた。

雲影重重浸二碧漣一。　哦詩客在二釣魚船一。

山靈亦似レ解二人意一。　擎出芙蓉雪色鮮。

同行は精進ホテルのお神さんだ。お神さんは、明治二十八年、十八歳の時からホテルに在りと云へば、先づ精進湖の主と云ふ可きであらう。馬にも乘れば銃獵もする、水泳も勿論であらう。一陰一晴、定めなき秋の空ではあるが、何れにしても秋色は、富士山麓の湖畔を見舞うてゐる。我等は眞に一歩一回顧の狀を禁じ難かつた。

餘りに遲刻したから、堀内君等は途中迄出迎に來てゐられた。それは午後から、富士の風穴を觀に行く約束あつた爲め。

（大正十四年十月廿四日午前五時、精進ホテルに於て。時に窓外の富士山は、全面目を現はし來つた。）

四　富士の風穴

十月廿三日、富士の風穴見物に、精進ホテルを出掛けたのは、午後二時過ぎであつた。舟中より空を見れば、白雲や、黑雲が、富士一面を掩うてゐる。用心の爲

め、番傘を借りて携へた。

我等は爪先上りの樹海を過ぎた、讀んで字の如く、熔岩の上に蘚苔生じ、その上に雜木林が密集してゐる。道路以外には、一歩も踏み込むことが容易でない。今や山毛欅、櫟、楢、櫚、朴などは、何れも時を得顔に黄葉してゐる。それにから松る蔦は、淺紅、深紅、或は淡、或は濃、而して丈〻櫻や、楓が、既に七八分の紅を潮しつゝある。此の密林の中を彼是二十五六町も上れば、漸く原野に出で來る。

此の原野にも亦た松や、落葉松や、楓や、其他の灌木が、點在してゐる。路上るに隨ひ、秋色は彌よ濃厚となつて來た。笻を立てゝ顧れば、一方には精進湖、他方には本栖湖が、何れも明鏡の如く、碧藍色を湛へてゐる。

斯くて我等は富士山の前景たる大室山の深林中に、又た分け入つた。而して所謂る風穴は、その入口數歩の間にある。大室山は、頂上の圓錐を見て、火山であつたことが知らるゝ。海拔一四七五米と云へば、獨立の山として、可なりの高山であるが、富士の隣山では、とても比較にはならない。併し富士を背後に控へて、蓊鬱たる林相は、良とに趣きが多い。

予は穴藏などは天然でも、人造でも、決して好物ではない。嘗て露國キーフ府の聖地洞穴を見舞ひ、露人が悠々として、其の穴の廻り角にて、蠟燭を上げ、十字を切り、跪拜なし、其の後から跟て行きつゝ、殆んど窒息せんばかりに困み、頗る閉口した。爾來江の島の辨天窟さへも、近づくを欲しない。然も折角堀内君が自から先達となり、且つ番人のお嫗さんが、七十二歳と云ひつゝ、我が老妻を案内す可く、自から先きに立つからには、今は致し方なしと諦めた。

先づ靴にガンジキを著け、蠟燭を手にし、魚貫して進んだ。入口は深さ三十五尺、方廿四尺の竪穴だ。それを階子で下り、それから奥深く行く。洞の方向は東北で、平均傾斜十三度、延長本洞百三間餘。本洞の幅は十六尺から、三十八尺、高さは

七尺五寸から、十六尺と云へば、如何にも樂である樣だが、今は氷が張り込めて、——當日は堀内君の好意にて、若干氷を切り開いたにも拘らず——尙ほ低き所は身を屈し、殆んど犬這にならねば通過し難い所もあつた。奥の廣場には、幾條の氷柱が、地上から洞壁の天井に、殆んど連らんとしつゝある。

漸く洞穴を出で來り、一と息嘘いた。予が弱蟲を嗤ふ勿れ。虎に喰はれたる話にて、氣絶せん計りに色を失うたる漢は、曾て虎に喰はれんとしたる、經驗ある者であつた。

番小屋にて、數個のステッキ原料を手に入れ、それを紀念に、歸途に就いた。

顧れば大室山の頂に連なる富士の肩先は、何間の間にか露はれ來つた。西の空は、夕燒けが、天を焦がしつゝある。而して此の夕燒けに紅葉は、一入と照りまさりつゝある。明日の好晴は此にてトせらるゝ。案内の或者は、夕燒に交る薄黑き雲が氣に入らないと云うた。成程仔細に見れば、それが見えないこともない。併しそれでも縱令好晴ならざるにせよ、雨でないだけは確かである。我等は樹海の中を、暗中摸索しつゝ、午後七時頃には、ホテルに歸りて晩餐の卓に就いた。

五　烏帽子嶽登臨

十月廿四日、午前四時、老妻は頻りに窓のカーテンを上げて、富士が出でたと、予を呼んだ。成る程窓前の老松の間から、曉色瞑濛の中、富士の巨人は、仁王立に、衝立つてゐる。此れでは本日は仕合好しと、朝餐に先ち、紅茶一盞、直ちにパノラマ臺へと出掛けた。我等は先づ精進湖の湖岸に沿うて、精進村に向て行いた。富士は遺憾なく、其の正體を露はし來つた。湖中には二三の小艇が浮んでゐる。朝霧は亂絮の如く、此處彼處の山を掠めて往く、水蒸氣は濛々として、湖面から起つてゐる。

我等はそろ〳〵登り始めた。坂路實に二十三町、標高一千二百米の烏帽子嶽の頂上がそれである。攝政王殿下、御登臨以來、道路を改整した由であるが、そ

れでも多少の急峻は免れない。但だ此の景色の爲めには、流汗の一升位は、決して高價ではない。併し如何に大觀を恣にせんとても、雨天であるか、左なくとも雲霧四邊を封じては、如何ともす可き樣がない。

然るに我等は、韓退之が、衡岳の雲を排した如く、殆ど眼界より、一切の雲霧を掃ひ去つた。南面して立つ山の帝王たる富士山は、云ふも更なり、精進、本栖は勿論、西湖、河口、若くは山中湖さへも、微茫辨ず可く。而して顧みて北望すれば、八ヶ岳を首として、所謂る日本南アルプスの連山、一瞥の中に收まる。或は最上の好晴には、駿河灣さへも辨ず可しと云ふが、我等にはそれ程の仕合は無つた。絕頂の小平なる所に、攝政王御登臨の紀念標が建つてゐる。それに梨本宮妃伊都子殿下や、李王世子御登臨の御題名なども見受られた。

我等の大觀は、以上に限つたことではない。遠くは富士山麓延長十里の、眼界垠りなき樹海や、近くは脚下の險崖、峭壁を裝ひつゝある、紅葉や、黃樹や。今や秋の眺めは、實に我等の魂を吸ひ取らんとしつゝある。而して前日我等が鱒釣の際に、竿を垂れたる本栖湖の磯岩さへも、歷々として眼中に映じ、その側に峙つ龍ヶ岳の青々、黃々、紅々の樹色、亦た幽禪染の窓掛の如く、映じ來る。而して富士山は、百獸中の獅子の如く、周邊に頓著なく、昂々乎として、眞に唯我獨尊の風情がある。

我等は本日是非歸京せねばならぬから、幽賞未だ已まずして、山を下つた。歸來朝餐の卓に就けば、正さに八時半。所謂る朝飯前の仕事とは、此事であらう。

六　精進湖より大森

十月廿四日、烏帽子嶽を下りて、精進ホテルに還り、急に朝餐を喫し、直ちに歸途に就いた。始めて精進湖の水面に、富士の倒影を見た。

昨日往復したる本栖湖までの路は、一夜の中に、黃紅の色がまさりて來た。本栖湖を廻りて、龍ヶ岳を右に眺め、富士山を左に見て、路は嶽麓の平原に出た。此

れから根原村までは、處々に熔岩が横はる外は、一望渺茫、只だ篠や、秋草や、灌木のみ。然も富士山は、其の全面目を露はして、我等と相接してゐる。何時も胸像や、薄紗面被にて、慊らぬ思ひをなしたる我等も、今日と云ふ今日は、富士山の毛細管が明く程、仔細に、頂上から爪先まで眺めた。

根原は既に駿河國である。此處にて茶を喫し、その家に干しつゝある千振の藥草を購ふ。此れは卽今の相庭、一貫目三圓五十錢と云ふ。附近隨處の原に野生する、可憐の薄紫の秋花である。此れから人穴を見、此處にて午餐す。人穴の側には、行者の塚や碑が、林立してゐる。その中には四十幾度とか、六十幾度とか、銘々登山の數が記してある。何れも享保以後にて、寛政から天保までのものが多い。明治大正の御世にも、此れと競爭する者があらう。

人穴の邊から漸く人間の臭を嗅ぐ心地がした。所謂る賴朝の富士の捲狩は、此邊から大宮までの間であつたらしい。此の附近には賴朝の狩宿もある。工藤祐經の墓もある。此れから上井出に著すれば、既に田を見、畑を見、一寸したる町を見る。而して我等は路を迂して、有名なる白絲の瀧を見、此處から自動車にて大宮に下り、直ちに淺間神社に參拜した。

予は明治十三年八月下旬、友人と東海道を東京に赴きつゝある際、岩淵を過ぎ、富士川の上から富士を眺め、急に登山したくなりて、道を轉じ大宮に赴き、一宿し、早曉淺間神社の神泉に、口と手とを淨め、幾許の白衣の行者と、登山の途に就きたるを記憶す。回顧すれば已に四十有五年。今や再び此の神池の、碧玉を轉ずるが如き湧泉を見て、坐ろに少年の當時を想ひ出した。

社務所にて晩餐を喫し、宮司等の好意にて、懷中電燈を點じて、神寶若干を拜觀し。此れより一氣富士驛に至り、六時三分の東京行汽車に乘るを得た。

本栖から人穴迄は三里、人穴から上井出迄は一里半、此の約五里弱は、實に一望際なく、全くの原であり、澤である。而して恒に我等と相對して、富士は其の全

相を現してゐる。平生富士山〳〵とあこがれながら、今日は眞に飽く迄看ることを得た。

熔巖磊磊雜茅菅。　踏盡高原岳麓間。
畢竟閑人饒閑福。　秋晴終日飽看山。

富士山は名殘り惜しさうに、大宮から富士驛に至る、夕暮の空からも、全身を出して見送つて呉れた。

七　信玄と甲州人

今遊は、十月廿二日の朝大森から御殿場に抵り、富士山の麓を廻りて、籠坂峠、山中湖、河口湖、西湖、精進湖、本栖湖、所謂る岳麓の五湖を見て、大宮から富士驛に出で、又た御殿場を過ぎて、廿四日の夜大森に還つた。乃ち三日にて、全く富士山麓を一週した。左程誇る程の遊程ではないが、豫て心掛けてゐたることを達し得て、頗る愉快であつた。此れは我等の案内者たる、堀内良平君の賜だ。若し時間があつて、附近社寺の古文書でも漁りたらば、面白き發見もありたらんも、それだけが殘念であつた。

甲駿の堺は、武田、今川、北條の爭地にて、特に駿州富士郡は、武田と北條とが、屢ば鎬を削りたる地だ。何れの淺間神社にも、此の消息を物語る文書がある。中には武田からも、北條からも、祈願文を捧げられて、神樣も局外中立の已むなきであらうと、思はるゝ資料もあつた。特に面白きは、武田の祈願文だ。吉田の北口淺間神社に於て見たる中に、

願狀

今度賴速踢倒豆相兩州、氏康氏政滅亡、如信玄存志、達本意、奏大平之凱歌、令得歸府安泰者、百歳以來相違之御社領、如舊規奉寄附、如在之禮奠、不可有怠慢者也。仍如件

永祿十三曆庚午四月廿八日

南無富士淺間大菩薩

の一卷がある。如何にも信玄其人の眞相を暴露してゐる。（第一）文句が學者臭い。（第二）成功條件だ。（第三）舊領恢復にて、新規寄附でない。神樣と取引するさへ、此の如く勘定高ければ、人間との取引が、如何に勘定高かつたことが、思ひやらるゝではない乎。

又た大宮の淺間神社には、

信玄息女北條氏政簾中也、今時姙懷之氣候、來六七月托胎必然歟。臨厥期而產平安、子母共無毫末之禍機者、歸富士淺間之神功。若夫禱祝不空、於中宮之室集一百衆之桑門、而令讀誦法華經王、加之可奉納神駒矣、感應之一件刻日竢之、仍願狀、敬白

永祿九丙寅年五月吉日

奉納淺間大菩薩御寶前　　信玄花押

刻日竢之などとは、神樣に對して不恭の文句ではない乎。此れは正しく神樣に懸賞して、受胎、平產を要望したものだ。

然も佳婿であつた氏政も、やがて信玄と敵となつたことは、前揭の願文が之を物語りてゐる。

惟ふに甲州人は、武田氏以來、必らず他を侵略し、他を征服するを本色としてゐる。此れは甲斐が山國にて、四方塞りなれば、餘儀なく之を蹴り破りて、四方に飛び出す必要があつた爲めであらう。奮鬪努力は、甲州人の本色だ。彼の一天四海皆歸妙法と絕叫したる日蓮上人は、甲州人ではないが、又た歸化甲州人だ。甲州人日蓮上人を感化した乎。將た日蓮上人甲州人を感化した乎。そは我等の知る

所でない。但だ武田信玄が、甲州人の代表的人物であることは、受合である。

岳麓遊記

一　御殿場より山中湖

過日堀内君、國民新聞社長室に來りて曰く、富士山麓の蓮華躑躅花は、天下の奇觀なり、御身輿に偕に遊ばずやと。予は欣然之に應じ、晴雨に拘らず、六月廿三日を期して、行くことを約した。

昭和二年六月廿三日、一行五人。堀内君は二男の義男君を伴ひ、予は妻及び末子武雄を伴ふ。夏至後一日、新聞の豫報を裏切りて好天氣、汽車の窓から富士山は、全面目を露はし來る。遊運の頗る大吉なるを豫報してゐる。

御殿場にて、堀内君の統率する岳麓電氣鐵道、及び岳麓勝地開發の關係者二三子相迎へ、相共に自動車にて、一氣須走を貫き、籠坂峠を超ゆ。車窓から仰げば、富士山は殆んど我等の頭上を壓せんばかりに、近く聳えてゐる。本年は例年に比して、特に雪尚ほ多きを覺ゆ。

御殿場山中間の籠坂峠の上下と、御殿場箱根間の長尾峠上下とは、予の最も愛好する風景にて、百回往來するも敢て厭はない。試みに籠坂峠から、上り來つた路を回看すれば、極目蒼々、岳麓の緩かなる傾射的平野は、神女の裾に似てゐる。俯して脚下を瞰れば、山中湖は、神女の明鏡の如く開いてゐる。

山中湖は約一千米の高地にある、湖水にして、其の四圍は何れも原野、若しくは草山、或は落葉松の林にして、何となく明るく、何となく開豁、何となく陽氣である。

山中は元來一寒村であつた。されど岳麓勝地の開發や、電氣鐵道布設の計企やらにて、今は殆んど舊時の面目を改めてゐる。新築の家なども少くない。新たになる雜貨店や、運送店なども出來てゐる。

我等は湖畔に出でゝ、老たる欅の蔭に立て、飽迄清風に浴し、四邊の光景に接觸した。然も何と云うても、富士は全景の王である。而して樹蔭から眺むる富士は、宛も北齋の富士百景中の意匠さへも、及ばぬ妙趣を覺えた。

二　山中湖一週

我等は船を湖上に浮べんとしたが、寧ろ湖畔を週るの快に若かざるを思ひ、先づ自動車の行ける所まで、行かんとした。

湖畔の土地は、殆んど堀内君等の會社の所有、若しくは借地にして、岳麓一帶を總括すれば、五百萬坪に垂んとすと聞く。而して我等は各個人、帝大、一高、麗應等の分割地を、縱横に過ぎて行つた。

林相は概ね落葉松にして、中には樅の類を見受けた。地味は火山灰にして、殆んど一石だもない。大地震以來、水量は減じたと云ふも、湖上の眺は、富士山と映帶して、得も云はれぬ風情がある。

我等は湖畔にて荆を班いて辨當を開かんとしたが、餘りに好景にあこがれて、自動車を驅り、遂ひに湖の東端平野村に入つた。而して村の有志長田金作君の家に到つた。

長田君は意外にも珍客の來るを見て、屐を倒して相ひ迎へた。其の家の四周には、櫪に似たるあらゝぎの巨木が、自から障壁をなしてゐる。何れも槎枒の巨木だ。床の柱は黑光りしてゐる。我等は辨當を開らき、又た茶菓の馳走に預つた。

家には面目奇古なる鐵佛があり、又た永祿十一年山縣三郎兵衞の記名あるものと、北條虎印の捺せられたる古文書等がある。主人は頻りに堀内君が、此邊の地價を高め吳れたるが爲めに、銅像でも立てねばなるまい抔と語つた。而して主人は又た何時ぞや予が山中にて――長田君知人の家とかや――蕎麥を喰つた話をした。

此れは大正二年の夏の頃にて、既に一昔の事だ。惡事千里と云ふが、蕎麥を喰ふのは惡事ではないが、斯く永く久しく評判せられては閉口だ。

村は文化風が吹き來りても、今尙ほ何となく落付てゐる。百戸の村は長田姓と、天野姓のみだ。我等は長田君夫婦の案内にて、湖畔に出でた。湖水は西南に開けてゐる。湖水を隔てゝ、富士山を西に望む。湖には小き中島があり、又た半島がある。而して隨處に魚叉を携へ、釣を垂れてゐるものを見る。

湖畔に朱の鳥居がある。天滿宮と云ふ。社域に欅の杜がある。何れも數百年の齡がある。長田君は曰く、其の一半を伐りて、社殿の修覆の費に使用したと。予は手を振りて、今後は決して一枝でも伐り給ふなと云うたれば、長田君も首肯した。喬樹は愛護す可し、英雄は崇拜す可し、歴史は尊重す可し。此れが予の三大綱領だ。

我等は長田君夫婦に別れ、湖畔を西へ富士に向つて奔る。長池村を經て、山中に歸著したのは、既に三時半を過ぎてゐた。此の如くして我等は、意外にも山中湖を一週するを得た。

三　大石茶屋の蓮華躑躅花

我等は山中から吉田に赴いた。吉田の淺間神社の鳥居前を過ぎ、愈よ登山口から上つた。此の登山口は縣道として、山梨縣が世話を燒いてゐるから、道路も能く出來てゐる。社域の杉檜の林を横ぎり、日本武尊の古跡と稱する大塚を過ぎ、諏訪森にかゝる。此森は亭々たる赤松の林にて、然も其の赤松の一半は、殆んど青蔦が其の幹を纏うてゐる。翠髪赤膚にして青衣を著く、晩秋蔦紅葉の時は、更らに一層の美姿を現せむ。

我等は一直線に路を上りて行く。中の茶屋に至る。此邊から躑躅の殘花を見る。而してまゝ菖蒲や、野薔薇の滿開を見る。滿目落葉松の林にして、林下の灌木は、又た概して躑躅ならざるはなし。

我等は富士に向つて、歩一歩相迫りて行く。行いて大石茶屋に至れば、今は富士に額を打ち付けん計りである。此の大石茶屋が蓮華躑躅の本場だ。案内の諸子が、

見渡す限り躑躅のみと云うたのは、寔とに其通りだ。但だ憾らくは期に後る十日、今は只だ此處彼處に殘葩を見るのみ。されどそれでも尙ほ觀る可き値はある。而して殊に我等は失望するよりも、意外の得物に歡喜した。そは間近かに、富岳の全面目を見るを得たからだ。

大石茶屋は、吉田登山口から富士の山頂まで、先づ其の半途だ。吉田から大石茶屋まで二里、茶屋から頂上まで二里十六町。而して茶屋から馬返まで約十町と云ふ。

我等は茶を喫しつゝ、霎時富士と靈接した。耳を澄せば、種々の鳥が啼く、鶯が啼く、雉が啼く、尤も多く啼くは郭公だ。而して偶ま子規が啼く。而してその子規が我等の頭上を掠めて、一文字に空を横り行くを見た。此に於て我等は徹夜して子規を聞く歌人を、憐まざるを得なかつた。而して世若し子規と郭公とを、同一とする人あらば、試みに大石茶屋に來りて之を聞けと云ひたい。

此邊には獨活がある。蕨がある、蕨は未だ全く拳を開らいてゐない。菖蒲がある、擬寶珠がある、松蟲草がある、虎の尾がある。躑躅は固より云ふ迄もない。我等は紀念に少しづゝ採集した。

四　大石茶屋より芙蓉倶樂部

我等は大石茶屋を下りて、吉田に至り、淺間神社の前を、遙拜して過ぎ、直ちに梨が原を貫き、鐘山の瀧の畔に車を停めた。

梨が原には、秋の七草は固より、山百合、姫百合、撫子、萩など、種々の野花がある。されどそれには季節が今少しく早い。今は只だ咲き殘りたる躑躅花と、白き野薔薇や、紫の菖蒲の類を見るのみ。

鐘山の瀧は、瀧と云ふ程の仰山のものではないが、山中湖や、忍野八海にて、漸く川らしくなりたる桂川の源流にて、それが檜丸尾と云ふ熔岩流に堰かれて、落下するもの。幅は五六間もあらむ、それが二條となりて、約二十尺の絶壁に瀉ぐ。

その下は急湍となり、老樹の根に觸れ、山骨の巖角に激し、白龍を躍らしてゐる。而して上には森々たる老樹あり。土地の人は、此の瀧を中心として、向岸の鐘山、若しくは城山を取り込めて、富士見公園と稱してゐる。今は正直のところ公園の卵である。

我等は更らに迂回して瀧の下流を過ぎ、向岸に渡りて、瀧を俯視し。更らに其の山の頂上の小平なる地に立つて、富士山を望んだ。

此處を鐘山と云ひ、又た城山とも云ふ理由を聞くに、鐘山とは武田勢が北條勢と戰うたる際、相圖の鐘を鳴らしたから、城山とは武田の侍小林某の城址であるからと云ふ。それは兎に角、富士山を眺むるには絶好の所、他日緣あらば、此處にも一基の詩碑を建てたい。

此邊滿徑、殆んど月見草ならざるはなし。植物學者の說によれば、月見草は輸入草にして、然も最近と云はざる迄も、近世的のものと云ふ。然るに今や日本全國、何れにも是れなきはなし。本日の朝、省電の窓から、川崎附近の玉川の河原を眺めたるに、滿地の黃葩、悉く是れならざるはなかりき。

我等は此れから忍野村に赴き、芙蓉倶樂部に投宿した。此處は溫泉宿であるが、家は新らしく、周圍は閑靜。富士は窓を排して入り、鶯や、子規や、郭公や、其他名を識らざる幽禽は、隨意に和鳴し、雪よりも淨く、氷よりも冽なる淸泉は、混々として地中より湧き來る。

五　忍野村と芙蓉倶樂部

芙蓉倶樂部の溫泉は、附近に東電の水力電氣用に、隧道を鑿ちたるに、偶然にも溫泉に掘り當てたれば、それを放棄するも、天物を暴殄する虞れありとて、土地の有志者が鉛管にて導き來り、電熱にて熱度を加へたるもの。泉質は詳にせざるも、無色透明、如何にも入浴して心地よきを覺えた。

我等は一浴して散歩した。道に接する川は卽ち桂川の原頭だ。而して其の附近隨

處に清泉が坌湧しつゝある。本年は殊の外の旱りにて、水が枯れたと云ふも、晩來池上魚躍り、富士山は景を倒にして、池面に映じ、其の山骨の劈さて襞をなす所、其の白雪の斑々として、黒白相錯る所、秋毫歴々、一として相ひ影照せざるなし。

池畔若しくは川岸に生ずる、水芹は、長さ尺餘に及び、農家は之を肥料とする由にて、何れも塘上に列ね干しつゝあり。而して清淺の流には、遊儵が群をなしてゐる。深處には鯉や、やまめもゐると聞く。

此邊は玉蜀黍の產地なれども、其の株は今や一二寸。而して麥は尙は青々として、收穫は七月下旬なりと云ふ。少くとも氣候は、東京と一個月以上後れてゐる。されば我等は、蚊帳を要せざるのみならず、却て重衾を擁して眠つた。而して夢は端なく富士山に向つて飛んだ。

此の附近には、溫泉の脈流、地下に通ずるであらう。若し專ら此事に從ふ者あらば、或は別に泉脈に掘り當てないこともあるまい。若し此處に幾許の溫泉が湧き出づる如きあらば、土地の面目、更らに一變を來たすであらう。但だざる場合ともならば、我等の如き閑客は、とても斯く呑氣に來遊することは出來まじ。

食膳には別に馳走と云ふ可きものは無つた。されど蕨とか、蕗とか、鮑とか、鮒とか、鯉とか、土地柄相應のもので、何れも嬉しかつた。

山中で鮪の刺身や、鯛の潮煮を喫するが如きは、珍味と云へば珍味なる可きも、餘りに不相應だ。食物は何よりも其の土地固有のものに限る。態々遠方から取り寄せるなど、却て難有迷惑に存ずる。但し此れは我等だけの事、世間には遠方から取り寄せねば、承知が出來ぬ人もあらう。

六　忍野村と富士山

六月廿四日、郭公や、鶯に夢を破られた。昨日は終日雲なく、富士山は朝から暮まで、其の全身を發露した。今朝は曉雲に其の下半身を掩はれたが、やがて風

吹き拂ひ、亦た全身を發露した。

我等は忍野村有志天野君の案内にて、忍野村に向つた。小高き大臼と小臼とは、道傍から指點せられた。何れも舊噴火口だ。

忍野村は此の山中に珍らしき平野だ。それも其の由緣がある。そは此地は從來湖底で、それが何時の間にや干拓せられたものだ。固より人工でなく、自然力もて。從つて其の土地も肥沃で、水田も多くある。南北都留郡中にて、米を輸入せずして、輸出するは、獨り忍野村あるのみと聞いた。

畑地は桑と玉蜀黍だ。家には鎔岩もて、嚴然と石垣を構へたものもある。概して何れの民家も、あらゝぎの生木を門柱とし、あらゝぎを横に扁らたく曲げて、生垣としつゝあるは、猶ほ武藏野の各村家が、樫を家の周圍に植ゑ、樫を横に扁らたく曲げて、生垣としつゝあるが如し。但だ何となく樫に比すれば、あらゝぎの方が、高雅に見受けらるゝ。

我等は村社の淺間神社に詣した。此處にも老樹が少くない。而して天野君に導れて、八海を見た。

八海は何れも自然の池である。此處は富士講行者が、一池を一海と稱し、それに八大龍王を、分ち主らしめたるものだ。今は八海の若干は廢し、其の存するものも、周圍の田圃から侵し狹られてゐる。されど鏡が池などは、今尙ほ富士山に映じて、池上の富士山は、却て天上の富士山よりも、鮮美の感あらしめた。

若し夫れ其の湧泉の滾々たる、我等が鄕里の肥後熊本水前寺の清泉と、宛も相ひ類してゐる。但だ泉頭にビール瓶の缺けやら、飯粒などを投じつゝあるは、如何にも美人にほ黑の嘆あるを免れない。天然を美化せざる迄も、せめて美なる天然を醜化せざれ。

全村二百餘戸、一戸として富士を見ざる家はない。天野君は曰く、我等は曾て富士山を怨んだ。此山有ればこそ、富士颪ろしの寒風に吹かれ、冬季四個月は、穴

に臓する熊の如く、遊んで寢て暮さねばならぬと。然も今や富士岳麓開發の會社出來、交通便利となり、地價上り、土地繁昌す。是皆な一として富士山の恩澤ならざるはなしと。されど恨まれても、感謝されても、富士山は依然富士山である。

七　歸途に就く

忍野村を過ぐ、其の近傍の草山は、何れも村の共有にて、それに上とか、中とか、宛も京都如意嶽の大字の如く、山の中腹や、上邊に描かれてゐる。此れは村の受持の部分を示すものにして、その茅が、村中の家根となり、家根換の時には、村中の組合相寄りて、手傳ふと云ふ。如何にも古風の美俗よ。

此れから英國植物學者ウイルソンが、天下一品と稱したる針樅純林を過ぎ、山中に出で、再び籠坂峠を過ぎて、須走に至り、御殿場から長尾峠に至つた。長尾峠では風が強かつたが、風强き爲めに、富士は頂上から裾野まで、殆んど秋の富士の如く、半點の翳りさへ無つた。

長尾峠から仙石原を貫き、湖尻に出で、蘆湖に浮んだ。湖上からの富士は、群巒重々の上に、富士が其の頭を擡げ出し、更らに一種の美觀を現じた。

我等は幽賞未だ已まず、水波大いに起り、一葉の小ボートは、縱波横浪に簸揚せられて、モーターは動けども、舟は中々進まない。已むを得ず箱根ホテルの下に著く可きを、權現下に著け、先づ午餐を喫し、それから蘆の湯を過ぎ、宮の下富士屋にて小憩した。

主人山口君、氣焔萬丈、頃ろ秩父宮殿下に向て、旅店慈善業論を申上た次第を繰り返した。今日の旅店は果して慈善業耶、否耶。そは議論の餘地あれども、苟も自己の業務に精進する者は、斯程の抱負ありて欲しさもの。

山口君は亦た殿下に向て、殿下は凡有るゲームに堪能であらせらるゝも、但だ一事の山口に及び給はざるゲームがある。それは金贏けのゲームであると申上げたと語つた。全く其通りであらう。

此れから三時五十分の汽車にて小田原を發し、堀内君父子と横濱にて別れ、省電にて大森山王草堂に歸着して、未だ靴を脱せざるや、雨は一點二點降り來つた。此行二日一夜。然も目的としたる富岳半腹の、蓮華躑躅花の期に後れたるも、富岳靈淑の氣を吸ひ、限り無き屈託と、疲困とを一洗し去つた。是れ偏に富士山と、堀内君と、遊運との賜である。

休養小遊記

一　御殿場青龍寺

人並みに避暑と云ふではない。但だ近頃定課以外の仕事が加はりたる爲め乎、聊か疲勞を覺えたから、兩三日休養かたゞ〳〵、岳麓を徘徊することゝした。輕井澤など、當世人士の群がる場所は、とても我等の安樂鄉ではない。

立秋後一日、昭和二年八月九日午前五時半、山王草堂を發した。御殿場には午前九時二十分に著いた。車中では七歳ばかりの金髮の少女が、あゝ富士さん〳〵と叫び、跳り上りて、窓から手を出してゐた。宛も手にて富士の頂上を摩するかの如くに。餘りに可愛らしかつたから、妻はバスケットから、桃二個を出して、彼女に與へた。

青龍寺の崇嶺和尚は、予が命名親である檀家の少年を伴ひ、御殿場停車場まで出迎呉れた。少年は大正二年八月、予が青龍寺滯在中生れたるもの。少者既に此の如し、予も亦た老境に入りつゝあるを、自覺せずして止む能はぬ。但だ仕合せには、未だ娑婆に執著が存してゐる。成す可き仕事が澤山あれば、餘儀なくも倦駑に鞭たざるを得ない。

古澤橋の邊に至れば、清泉は混々として幽徑を廻り、竹籬に傍ひ、寺門に入りつつある。萩は既に門から庭まで生ひ茂りて、二三分の花を開いてゐる。十五年來の舊知たる裏庭の水車も轉りてゐる。而して西窓の竹林を透して、富士山は其の

全面目を現はしてゐる。

予は籐床の上に兩脚を伸ばし、手にしたる湛然集を讀みつゝあつたが、何時の間にやら華胥の境に入り、覺め來れば書物は床下に落ちてゐた。午後も亦た富士山に對して、新句を按じたが、また快眠し、醒め來れば三時であつた。

岳雲呑吐早凉生。　籠外微風竹影清。

午夢醒來禪院寂。　禽聲斷續和二泉聲。

それから西瓜の馳走になり、同行の妻、兒、及び金田君等と寺門の附近を散歩した。毎日午後は夕立の來る約束だと聞いたが、當日は來らなかつた。されど爽凉の氣は、夕立を迎ふる必要はなかつた。仕事もなければ、夕食の後、やがて打ち臥した。甘睡天明に至つた。能くも斯く睡れるもの、我ながら感心する。

（昭和二年八月十日午前五時半、青龍寺北窓の下、胡枝花と相ひ對して。）

二　青龍寺及其の附近

八月十日、木魚の響にて起き出でた。朝霧四邊を罩めて、咫尺稍く辨ず可し。何となく濕りぽく、雨なくして皆な潤ふ。

我等は朝露を蹈み分け、野徑を逍遙して、中丸の蓮靜寺に至つた。寺は何れも喬木にて圍れてゐる。特に屋後の老杉は、孤幹亭々、眞に愛す可し。其の門内の石燈籠、石水盤等、何れも元祿の年號が彫られてゐる。我等は浴衣がけに革帶——洋服用——をしめつゝ、寺内を徘徊しつゝあつたが、和尚さんに認められ、前年は御揮毫を忝くしてとの禮を述られ、聊か面喰つた。後にて聞けば、青龍寺和尚の紹介にて、何か書いたと云ふことだ。

蓮靜寺和尚さんの話には、從前は門前に老大なる欅の並木があつたが、伐り去られた。屋後の老杉も、既にそれ〴〵物色せられ、評價せられてゐるが、惜しき爲めに殘して置くとのことだ。予は吳々も此れだけは、寺の寶物として護持せられよと依囑した。

朝餐後は古澤なる淺間神社の老杉を訪問した。此の社内にも從前は多くの喬木があつた由なれども、今は數株に過ぎない。中にも二株の老杉は、大正二年八月、欣賞の餘、之を撮影し、『山水隨緣記』に收めたが、今回も亦た同行の末子をして撮影せしめた。此杉は巨大と云ふばかりでなく、其の枝振りが、如何にも特色を持つてゐる。

朝もやは未だ晴れず、雨とならんと欲して雨降らず、却て風を生じた。竹簟の上に午睡すれば、何とも名狀し難き快味がある。王荆公が屢ば鐘山の寺院に遊び、午睡を貪ぼりたることの、今更ら偶然ならざることが思ひやらるゝ。

午睡醒め來りて、愈よ青龍寺和尚に宿債を償ふ役に從ふ。震災復興の爲め、予は曾て揮毫百枚を喜捨す可く奉加帳に書した。然も果したのは、其の一割に過ぎず。今更ら面目次第もない。聞けば野田大塊居士は、一度に三十五枚を寄進したと云ふ。此に於て予は和尚と條約改正をなし、月に一鷄を攘むの例ではないが、年々一割づゝ、年賦拂となし、愈よそれを實行し始めた。

野水環レ家村趣濃。　萩畦竹塢絶二塵蹤一。
十年四訪青龍寺。　唯爲二門前有二士峰一。

はぎは胡枝花、若しくは天竺花と云ふ。萩字を用ふるは、恐らくは妥當であるまい。されど非詩人の詩なれば勘辨ありたし。十年と云ふも、其實は足掛け十五年だ。詩には歴史的精確は用捨ありたし。

高根村附近は水が潤澤なれば、稻作も見事だ。特に見事のは桑園だ。從來畑を田に改めたが、その田を今また桑園に改つめゝあり。田に桑を作れば、桑葉潤うて、其効著しと云ふ。中にも晩秋蠶用として、繁茂しつゝある魯桑の見事なる、蠶ならで、人間が喰うても甘まさうだ。聞けば晩秋蠶は此地の産として最も良好であると。

晩餐以前、又たしも野徑を此處彼處と逍遙した。撫子の花が、今を盛りと咲いて

ゐる。或は茅屋根の上にさへも咲いてゐる。つりがね草、我亦紅の類、其他我等の名を知らざる野花が歴亂としてゐる。

想起す。明治十三年八月、東海道を旅行し、岩淵に至り、富士を眺め、乍ち登嶽の志を生じ、大宮口から登つた。爾來富士は登るよりも、眺むべきものであることを、體驗した。

憶曾蹈レ頂立二孤筇一。
岳麓而今禪榻上。
昂昂名山落落胸。
飽伸二閑脚一看二芙蓉一。

敢て負け惜しみを申すではない。籐椅子の上に寢そべり、双脚を伸ばしつゝ、富士山を正面に眺むる氣分は、とても斯境を經たものでなければ、與に語ることは出來ない。

青龍寺和尚の好意にて、別に訪問の客もない。我等は竹林の幽禽同樣、我等の爲す儘に一任せられ、眞に呑氣の日を暮らした。携ふる所、只だ王荆公絶句、耶律楚材の湛然集、及びMathew Arnold集のみ。

夜は瀧口君が餅を携へ、芹澤國手が玉子うどんを携へ來られた。何れも舊交だ。

芹澤國手は、予に『古家關址』の四字を石に書せんことを依囑し、瀧口君は史蹟保存のことに就て相談した。何れも快諾した。

瀧口君の所説には、先生から屢ば老樹愛護の訓誨を承つたが、震災後餘儀なき事情にて、大木が漸〻減少する傾向があるとのことであつた。予は前に蓮靜寺和尚に訴つたことを繰り返し、國に喬木あるは、國に歴史ある所以、又た國の品格を高くする所以、故人は親しむ可く、古酒は飲む可しと西洋の諺があるが、古木は猶更ら愛護せねばならぬと、例の繰り言を、又たしも繰り返した。

（昭和二年八月十一日午前六時、青龍寺に於て、水車の轉ずるを眺めつゝ）

三　青龍寺から芙蓉倶樂部

八月十一日午前八時二十分、青龍寺和尚、瀧口君等に別を告げ、併せて庭の萩花

にも明年を約して、御殿場から須走を過ぎ、籠坂峠を越ゆ。富士岳麓の野花、今や既に擬寶珠の盛を過ぎ、野菊の節に早く、正しく撫子、女郎花滿開の期だ。

觀賞應接に遑あらず。我等は山中湖畔を過ぎ、梨が原の中途から右折して、桂川――相模川――の水原なる溪流に沿うて溯り、忍野村なる芙蓉倶樂部に到著したのは、十時やゝ過ぎる頃であつた。

去る六月下旬、始めて堀内君の案内にて、此處に來た時には、如何にも靜寂境であつた。然も此處も亦た浮世なりけりで、客は殆んど滿員だ。但だ我等は仕合せに、安住の室を提供せられた。

前遊の際に、屢ば聽いたる杜鵑や、郭公は、既に去つたが、鶯や、ほうほう鳥は、頻りに啼いてゐる。手にも捉られんばかりに、屋後の溪流に群がる鮠は、思の外小利しこく、中々鉤には上らない。されど我等の熱心の爲めに、兎も角も晩餐のフライの原料だけは出來た。

青龍寺を出る時には、富士山は殆んど全面目を露はしたが、漸次に雲に包まれ、忍野に至れば、殆んど全面目を沒し去つた。而して驟雨は、我等の著するとやがて、沛然として下つた。されど如何に降つても、地面は火山灰なれば、宛も漏斗に水を覆す如く、悉く吸ひ込み、直ちに乾いた。

氣候は浴衣掛では、チと涼し過ぐる程だ。玉蜀黍も漸く赤髮を出し、南瓜も今が花盛りだ。何も申分はない。但だ蚊が案外に多いだけが、疵と云へば疵であらう。

我等は做す事もなければ、午後八時には寢た。夜來大雨盆を覆すが如く、幽夢を驚かした。今朝午前五時起き出れば、一天墨の如しだ。扨ては困つたものと、本文を綴りつゝ考へてゐたるに何時の間にやら、雲破れて寸々の青空は、現はれ出でた。今日の天氣雨となる乎、晴となる乎、未だ知り難し。されど何れにしても、午後は函根方面に向ひ、明十三日には歸家せんとす。

（昭和二年八月十二日午前五時四十分、甲州山中湖の附近に於て、鶯聲を聽きつゝ。）

四　蕎麥

八月十二日、朝餐には忍野村有志天野君から、蕎麥を贈り來つた。此邊の蕎麥は香味殊に佳、色の白さは七難匿くすと申すも、蕎麥だけは必らずしも然らずだ。予は飽喫し、其の殘餘は午餐にと申したれば、一行皆な予の貪饞を嗤うた。併し予に比すれば、梁川星巖などは、より一層の蕎麥好であつたらしい。その詩集には蕎麥を嗜む命の如しと題し、蕎麥の花を見て、涎を流したる詩がある。而して新島先生に至りては、又たより一層の蕎麥好であつた。先生が京都から東京に來らるゝ毎に、最初に訪問せらるゝは蕎麥屋であつた。先生が曾てある蕎麥屋に腰打ち掛けて、蕎麥を攻擊しつゝある際、傍に居る書生が、ふと振り廻り見て、ヤー先生と呼び掛けたには、冷汗をかいたと申されたことを記憶してゐる。書生は同志社の舊生だ。

明治十五年の七月、先生と木曾路を經て東上の際、寢覺にて蕎麥を競食し、先生九杯、予は死する思をなして更らに半杯を贏ち、遂ひに先生をして代價を拂はしめたことがあつた。而して明治二十年二月『國民之友』の發刊に際しては、先生は御祝儀として、更科のざる蕎麥を、山の如く贈られた。

予は多くの點に於て先生に及ばぬが、蕎麥だけでは、門人たるを辱しめざる積りであつたが、今は舊時に比して、半ばと云はんよりも、殆んど四分の一に減じ去つた。

風驅白雨氣凄清。　無賴雲峰頽復生。
玉黍漸花瓜未熟。　山中八月聽流鶯。

此れは昨日の口占だ。天氣都合はよいが、第一の主人公たる富士山が顏を出さない。同行者の一人は、寫眞機を擁して空しく浩嘆してゐる。されど魚釣りには幸多かつた。

予は何事もせず、只だぶら〳〵逍遙してゐた。何事をも爲さずして時を消すこ

とは、一時間でも中々長い。併し山中の氣分は、如何にも清々しくある。

昨夜來の大雨は、今朝晴れ來つたが、天の一角には黑雲が猶ほ殘つてゐる。午後になりたらば、それが夕立となるであらうと、掛念せられた。掛念と云へば只だそれだけであつた。而して午餐にも又た天野君の蕎麥を啜つた。

五　銀彈亂射

十二日正午を過ぐる半、芙蓉倶樂部を發し、夕立前に籠坂峠を突過せんと、黑雲の空を目掛けて急いだ。山下にかゝれば、白霧糢糊、雨ならずして衣帽皆な濕うた。峠に近く頃は、雲片が手にて掬せらるゝ程となつた。峠を越ゆるや否や、白雨沛然として來つた。我等は夕立を避けんとして、却て夕立の眞中に突貫したのだ。

我等の自動車は、率直に云へば老朽せるフォードだ。馬で云へば二十歳以上であらう。然も上蓋だけにて、後も、左右も、明け放しだ。雨は乍ち時ならぬ急流激湍を生じた。痛快と云へば、痛快至極だが、閉口と云へば、閉口至極だし雨は土沙降りに降る。然も泣顏に蜂にて、須走を過ぎ幾許もなく、乍ちパンクした。今更ら致方もない。但だ修繕は案外速かに整ひ、又たも車を飛ばしたが氣が急く程に車は中々進まない。

然るに御殿場を過ぎて二岡に至れば、雨は何處にやらで、道上には車塵が滾じてゐる。愈よ長尾峠にかゝれば、黑雲が後から追擊して來た。雲脚の疾きは車脚に倍してゐる。乍ちパラ〳〵やつて來た。今度は籠坂峠程のことはあるまいなど、豪語しつゝある際、又たしも沛然。更らに猛然。

峠の隧道にて、車掌君は姑らく雨よけをせんと申し出でたが、空相を見れば、中〳〵止みさうでないから、車掌君を促がして、一氣に坂を下らしめた。併し器械が傷んで操縱意の如くならず、漸く仙石原に來り、仙鄕樓に入らんとして、此處彼處をまごつき、或は小學校に、或は他の別莊に、而して最後に仙鄕樓の入口に至

り、妻は此處は團さんの別莊ではあるまい乎など、掛念しつゝ入つた。果然仙郷樓にたどり著き、漸く一息ついた。

雨は愈よ降りしきつてゐる。我等は濡鼠同樣である。自動車は佐野源左衞門の馬である。妻の傘は途中馬力と衝突して、骨が曲つてゐる。予の手提鞄は、前世紀の遺物である。如何に高く見積りても、お客さんとして、先づ喰ひ逃げせぬ丈の代物以上とはふめない。

されば宿屋からお相にくさまの擊退を喰はないのが、仕合であつた。折しも滿員大繁昌の模樣にて、我等は姑らく玄關に留置せられた。此處にて浴衣に著換よとのことであつたが、まさか稠人廣座の眞中にて著換る譯にも參らず、彼是してゐる中に、賴ひに一室を提供せられ、一浴快然となつた。然も雨は尙ほ降りつゝいてゐた。若し隧路の中にて雨よけをしたらんには、一夜を隧路の中にて、過さねばならなかつた。

九折羊腸盤ニ半空。　四圍山色白濛濛。
疾風忽挾ニ烏雲一到。　身落銀彈亂射中。

六　仙石原より大森

八月十三日、昨夜雨聲を聽きつゝ睡つたが、今朝午前三時頃、ふと眼を醒せば、樹影が障子に映じてゐる。扨ては月明かと、起つてそれを排すれば、全くその通りだ。舊曆七月十六夜の月は、櫻杪に氷輪の如く掛りてゐる。

昨夕雲霧の中に沒したる、金時山は、今朝來現はれ出でた。白雲は嶺上を搖拽してゐる。やがてその雲も、何處へか還り去つた。

我等は浴衣掛のまゝ、朝露を踏み分けて、仙石原を逍遙し、湖尻の方へと進んだ。昨日行路難を歌うたる長尾峠の隧路も、歷々として彼方から眼邊に近づき來つた。

本年の晩春は、宛も野火燒不レ盡、春風吹又生の候に、此地を過ぎ、思ひ掛けなき蕨狩りをした。今や秋花爛熳の候だ。殆んど滿地女郎花と云ふも差支ない。

それに撫子や、姫百合や、紫色の擬寶珠や、虎の尾や、松蟲草や、種々の野花が自然に排列し、種々の色彩が自然に配合してゐる。

金時山下野人家。　仙石原頭草徑斜。
兒女亦知天趣好。　輕裙浥露折秋花。

此れは正しく所見の口占だ。

午後は愈よ下山の期となつた。仙石原の仙郷樓は其名の如く、實に好位置を占めてゐる。若しお客さへ雜沓せねば、移動別莊としては、指定せらる可き一であらう。されど宿屋にお客の雜沓の苦情を云ふは、餘りに利己的だ。相ひ成る可んば客閑室曠の機を見て、一遊す可であらう。

小田原に抵れば、下界は實に煩熱人を蒸殺せんとす。殘暑凌ぎ難しとは、手紙の紋切形であるか、全く其の通りだ。斯くて三時八分小田原を發し、五時過ぎに、大森なる山王草堂に還つた。昨日の雨は如何と聞けば、相ひ換らずの旱りつゞきで、井水が減じて困却するとの答であつた。

此行天氣都合に於ては、先づ中の下であつた。九日には富士を見たが、十日以後は殆んど其影を沒した。特に忍野なる芙蓉倶樂部には、只だ富士を見んが爲めにのみ赴いたが、其の目的を果さなかつた。併し足掛け五日、飽迄岳麓清淑の大氣を呼吸し、心身兩ながら爽快となつた。（昭和二年八月十五日、大森山王草堂に於て。）

寶珠莊の半日一夕

其一

只今靜岡縣蒲原の寶珠莊―田中光顯伯の住居―の一室、電燈の下、臥しながら此文を綴る。臥しながら文を綴ることは、大正八年築地林病院以來の事。

我等は隨分舊さ知邊である。明治二十三年、伯が第一次山縣內閣の警視總監たるや、都下の新聞記者を、鍛冶橋官舍に招待した。予も其の一人として相見た。監視總監と云へば、恐ろしき人と思うたが、案外譯の分つた話であつたから、予は當時薩摩芋の眞中に、儒雅の總監ありとの評判記を試みた。

當時伯は四十八歳、予は二十八歳。今や伯は八十三歳、予は六十三歳。如何に歳月は、我等を變化せしむるも、伯と予との二十歳の間隔は、依然たり。到底百年經つとも、追付く可きではない。

何を申しても維新以前の志士として、現代の一人は伯だ。先帝陛下に咫尺して、其の信寵を忝くしたる一人は伯だ。伯は維新史、明治史に取りては、佩竟の資料の貯藏者であり、且つ伯自身資料其物である。予が伯に向て、如上の意味にて訪問を約したるは、大震災以前であつた。否な餘程その以前であつた。

予は屢ば明治年間、若しくは文久、元治以來の事に付き、伊藤公の誨を承けた。而して更らに聽かんと欲する所あり―例せば元田先生の先帝啓沃の件に付て―公も亦た他日を期して語らんと約されつゝ、遂ひに哈拉賓事變の爲めに、畫餅に歸した。されば せめて青山伯に向ても、此悔を再びするなからんことを欲し、其の日時を約して、愈よ大正十四年五月廿五日、高橋源一郎君を拉へて、早朝大森を發した。そは寶珠莊にて、午餐の待ち設けあることを、豫じめ伯より通知し來てゐたからであつた。途中は久し振りに青葉、若葉を透して、白雲の上なる富士を眺め得た。

其二

節は麥秋に近い。沼津から富士川沿岸迄は、桃や、梨の圃が多い。川を過ぐれば枇杷の實に袋を被せたるもの、山麓より山の半腹迄、累々としてある。蒲原は東海道の一驛にて、七分は漁、三分は農と云ふ割合、途上隨處に櫻海老を干してゐる。

寶珠莊は蒲原宿の東端、停車場から、五分歩行程であらう。林樹蓊鬱、山に倚り崖を擁して、自から一郭を成してゐる。廣大と云はんよりも、幽奥と云ふ趣きがある。

田中伯と相見て驚いたのは、其の若くて元氣が溢れてゐることだ。此れはお世辭なき事實。とても八十三叟とは見えない。其の髮毛は薄いけれども、尙ほ黑し。少くとも予の頭上の雪に比して。

一切月並的の挨拶は抜きにして、直ちに本題に入つた。食事中も固よりである。

箸を投ずるや、直ちに室中の案内を請うた。予は世間に喧傳せられた目白御殿、若しくは岩淵御殿を見ない。されど此の寶珠莊の建築は、壯麗と云はんよりも、堅實にして、且つ便利に、清潔にして、且つ幽雅、其の茶人程に凝らぬところに、自から田中一流の手法が現はれてゐる。

家と庭とは、目と眉の間、緣側を繞りて泉が流れ、泉に沿うて篠竹、灌木叢生す。自然に迫りて、自然の蕪雜を除き、人工を極めて、却て自然に迫りつゝある。家と云ひ、庭と云ひ、宛も晩唐の詩を、具體化したる趣がある。

斯くて直に御庭拜見と出掛けた。此れには若干の勇氣を要す。とても軟脚の都人士では、愉快の程度を通り過ぎる。伯はステッキを手にし、古き鳥打帽を被り、先導す。其のステッキは、息杖ではない。萬一蛇に出會したらば、叩き殺す爲めであると語つた。

田中伯も蛇嫌ひの一人だ。伯曰く、此の屋敷中には一疋の蛇も居ない。そは懸賞

にて悉く退治するから、但た偶ま外來の客―忌む可きものよ―がある。故に相見れば、叩き殺すと。予も蛇嫌ひでは、恐らくは伯の下ではあるまい。但だ予は蛇を見れば、回避し、伯は積極的に退治す。勇怯相去る三十里とは、此事であらう。

其三

寶珠莊は、蒲原宿の東端、東海道より山手に折れて數百歩。其の東隣は神社の森に隣り、樟や、椎や、椿などの大木天日を蔽ふ。而して其の西は段々畑にて、伯の菜圃や、花苑や、溫室やあり。背に山を負ひ、前に東海道を隔て、駿洋に臨む。良とに形勝を占めてゐる。

先づ廻りて屋後に出で、溪に沿うて溯る。此溪を狸澤と云ふ。溪に圯橋を架し、飛石を敷き、崖を劈いて、徑を拓く。小亭あり、八疊亭と云ふ。狸の睾丸八疊敷より來る。其下六尺のタンクあり。此れが田中家の生命の水溜である。愈よ進めば、徑愈よ急。時には巨巖落ちんと欲して、兩崖の間に嵌まり、自然の洞門をなすあり。而して石徑窮まる所、兩崖幾丈、相接して尺に滿ざる邊、飛泉掛る。稱して鼓の瀧と云ふ。此れは狸の腹鼓より來る。其の兩崖は凝塊岩にして、田中伯は是れ自然のコンクリートと云ふ。凄冷の氣人を襲ひ、五月下旬尚ほ寒きを覺ゆ。

此れから踵を回して、松隣閣に至る。展望尤も妙。更らに別溪を過ぎ、石徑を上りて、最高の擁江亭に至る。此處からは三保、薩埵の勝景、伊豆の半島、何れも盆山の如く、駿河灣は盥の水に似たり。蜜柑畠あり、橘香人を襲ふ。

下りて蘆葉菴に至る。蘆葉菴は、所謂る足場菴だ。足場の古材木で作つたから、斯く云ふとの事。此處では先輩勤王家諸有志の祥月命日に香を燒き、茶を献ずると云ふ。

此處にて又た食事中の題目を繼續し、遂ひに六時を過ぐ。家人に促がされ、本館

の西洋客室にて、晩餐の馳走に預り、食事中は固より、遂ひに午後十時に至つた。而して伯は一たびも欠伸せず、些子の倦色なく、此儘ならば、殆んど夜を徹せんとする勢であつたから、予は辟易して、一先づ中止を請うた。此の半日半夕の對話、約十時間。のべつ幕無しの長町場であつた。

其の話頭は千種萬樣なるも、要は維新前後より、明治年代の史料であれば、今ま茲に公表す可き筋のものではない。併し何かの機會には、伯の好意を無にせぬ積りである。

予等は此の人間離れのしたる閑莊に、一夜を明した。夢は現在の世の中よりも明治の御世に飛んだ。予は此遊に、實に豫想以上の收穫ありたるを悅ぶ。

（大正十四年五月廿六日午前五時、蒲原寶珠莊の一室、臥床の上に於て。）

靜岡の半日一夕

五月廿六日早朝、重ねて夜來の話を繼ぐ。八十三の田中伯は、睡眠四時間にて足れりと云ふ。卓上の搔餅咬んで響あり。六十三歳の予は總入齒であるに、伯は未だ一本の入齒さへない。伯は梅田雲濱や、高杉東行の書狀を出し示さる。何れも人間味の多き珍什である。更らに種々有用の史料を見る。斯くて十時に至り、相伴うて蒲原なる寶珠莊を辭し、靜岡東鷹匠町の熊澤一衞君邸に抵る。

熊澤君は篤志の實業家である。彼は金を贏くる道に達し、併せて其金を善用する道に達してゐる。例せば佐佐木信綱博士等の校本萬葉集の如きも、專ら君の後援によりて、完成するを得た。其の鄕里の伊勢に於ける、其の定住所の靜岡に於ける、君が公共の爲めに盡したる所、頗る見る可きものがある。拙著『國民小訓』の如きも、君の力によりて、若干地方青年諸君に頒布するを得た。

庭上水石、竹木、自ら幽趣あり。難を云へば、只だ庭全體に古色の蒼然たらざることのみ。此れは歳月の力を藉らざれば致方なし。田中伯一古石燈籠を指して

曰く、高橋箒菴君の茶人の魁にして、此の庭を賞して、是を看過したるは、如何にも殘念と。成程伯の解説によれば、面白き燈籠と覺ゆ。

予等は廣間にて、故らに名古屋より招きたる庖人の、會席料理の馳走に預り、其の新茶室にて、薄茶の饗應を受く。此の茶室は、本日が始めての開席と云ふ。

それより田中伯、熊澤君と相伴うて、新築の縣立圖書館葵文庫を見る。此は地方的圖書館として、如何にも心地善き建築である。其の内容に就ては、既に舊知に屬す、改めて云はず。但だ意外にも、恩賜官本、林春齋の舊儲であつた、明板趙松雪集に、宋象賢の印あるを見出したのは、愉快であつた。宋象賢は、東萊府使にて、文祿の役に、討死したる一人。其の委詳は、予が『近世日本國民史』朝鮮役中に大書してゐる。

歸來更らに田中伯等と相語る。而して午後九時に至り、伯は蒲原に還り、予は此の新築の茶室に、數時の夢を結んだ。

壁上天下老和尚一休の詩を掲ぐ。曰く、

狂雲道法屬狂風。　朝在山中暮市中。
我若當レ機行棒喝。　德山臨濟面通レ紅。

と、如何にも面白き出來榮であつた。知らず誰か德山、誰か臨濟。

熊澤君の語る所によれば、佐佐木博士(信綱君)同人と相伴ひ、拙邸に來宿せらるゝが、其の風采の閑雅にして、溫柔なる優男に似ず、其の鼾聲雷の如く、屢ば同宿者を辟易せしむ。此に於て佐佐木博士の爲めに、此の一室を築き成したりと。予や偶然博士に先て、此の新室を占む。博士の鼾聲に負ふ所、實に多大と云はねばならぬ。

併し鼾聲は博士のみの特技ではない。蘇東坡は勿論、天下の名士、其の類甚だ多し。未だ博士の煩ひとなすに足らず。但だ博士の優男なるが爲めに、聊か問題となる耳。

熊澤君の廣間には、雪舟の維摩居士と、霞崖の、

天台映レ水水涵レ城。　城外長橋斜照横。

一道松林湖驛路。　不レ知身在ニ畫圖一行。

の一幅がある。霞崖は申す迄もなく、賴春水だ。此れは大津から膳所城を過ぎ、勢田長橋を過ぐるの光景を詠じたものであらう。

尙ほ床脇に一の鰐口あり。御寶前長祿二戊寅太田資持入道の銘がある。卽ち江戸城築造の歳。此れは江戸芭蕉菴の舊物にて、正しく太田道灌の奉納したるもの。

此行鐵舟寺に赴き、大岡君父子、及び舊知諸友に面會せんと欲して果さず。而して靜岡の諸友と、舊情を暢叙するの機を得ず。時間に限りあり、致方なし。

此行尤も愉快なるは、田中靑山伯によりて、多くの修史上の資料を得たる事。熊澤一衞君によりて、馳走を受けたる事。而して總ての香氣中、最も芳しき橘の花の香を嗅ぎたる事。而してそれに附加するは、何れの旅行にも必らず面倒の種子たる、演說の要求と、揮毫の强制に預らなかつた事。

靜岡縣は眞に樂土である。富士山を我物とし、風光美、氣候溫和、土地豐饒、山海の物產多し。天下一の狸爺家康が、老を此地に養うたのも、亦た所以ある夫。

一日半の遊行

飄然中秋の日、靜岡に赴く、車中舊友に遭ふ、談笑の中に到著。宛も女優五月信子の靜岡入りと、ぶつつかり、人山人海の中をくぐりて、大東館に小憩し、直ちに安倍川の鐵橋を過ぎて、鞠子より、吐月峰に遊ぶ。

東海道の眞面目は、此邊が最も完全に保存せらる。兩山漸く迫らんとし。峽間の稻田の中を、渦卷きて貫きたる、松の並木の道を行く樣は、全く廣重の繪其物である。

鷄頭は赤く、稻は黃、霜に近き柿實は、少しく色を帶びんとす。吐月峰には庵主不

在。偶ま竹林の中に分け入りて、節の原料を求む。留守居の一女子、鍬を携へて之に隨ふ。木六竹八、今が竹を伐る好期節である。五十錢銀貨二片を投じて去る。

靜岡では、友人熊澤君の月臺莊に遊ぶ。雅談夜に入る。舊曆の八月十五夜とて、特に芋飯の馳走になる。蟲は庭にすだき、水は階を廻りて流る。幽趣極りなし。

今朝東京を出る際は、雨又た曇、到底明月を期す可くもなかつた。月臺莊の夜話、偶ま窓外に聲あるもの、予思へらく是れ雨聲と。焉んぞ知らむ、是れ泉聲なるを。窓を排すれば、大月盆の如く、老樹の枝に掛り、高天一碧、寸翳なし。

不レ須絲竹兼二杯盤一。　蟲語泉聲興自闌。

好是中秋一輪月。　靜陵城畔與レ君看。

主人飲を解せず、予は云ふ迄もなし。主客番茶を啜り、菓子を喰ひつゝ、月見をなす。風流と云はん乎、無風流と云はん乎。風流無き所、亦た風流と云はん乎。

此行、蒲原に青山老伯を訪ひ、史料を得んと欲す。偶ま老伯兩毛に赴くの報あり。乃ち卒として一首を賦し、熊澤君に託して贈る。

芙蓉峰下海東濱。　託二跡樵漁一度二幾春一。

但有二葵心不二磨去一。　瑞雲深處拜二楓宸一。

快眠一夜、今朝靜岡を發す。途中久し振りにて、富士山の全面目を觀た。穰々瀾望、本年は實に豐年滿作と思はる。

縱横野水碧溶溶。　滿地黃雲千萬重。

何日名山藏二好著一。　一天秋色對二蓮峰一。

此行一日半。實に生命の洗濯であつた。（大正十四年十月三日午後二時、國民新聞社に於て。）

三日の旅

二月廿三日（大正十三年）の朝、飄然老妻と與に、大森から緩行汽車にて、靜岡に向うた。予は傘を、老妻は足駄を、何れも雨の準備して。

大船から先は、震災後始めてゞあつた。大磯邊から怪しげなる天氣模樣が、漸次に善くなつた。沿道梅花滿開、別けて二の宮、國府津邊から、松田、山北迄は、山も、崖も、岡も、水邊も、林際も、梅花が多かつた。中には震災の爲めに、倒れながら咲いてゐた。箱根峽谷の崩壞の狀を見れば、震災の名殘が、今尙ほ歷々だ。陽光は漏れ來つた。されど富士は嶺上のみか、麓迄も、重雲に包まれてゐた。沼津にて友人と相見、原驛の邊に至れば、富士は少しく頂上の一角を現はした。興津より友人同乘し、予等は江尻にて下車し、直ちに鐵舟寺に向うた。此處は其の大字が富士見と稱せらるゝ通り、富士山を見る、最好の地點だ。併し今日はとてもと思うたが、雲は何時の間にやら風に吹き散ぜられ、富士の全面目が出で來つた。予等は寺畔の椙原山に上つた。此れは小丘にて、宛も城跡の如き地形だ。此邊からの展望は、亦た格別だ。三保松原を前景とし、伊豆の半島と、駿遠の平野や、諸峰とを、其の傍景とし、山海の中に只だ一個、實に頂天立地、乾坤の神秀を鍾めたる、巨人の眞面目を發揮してゐる。

靜岡にて夜有志諸君の茶話會に出席した。演說と云ふ程ではなかつたが、聊か英國勞働黨內閣の出現迄の事情を語つた。自分では二十分位と思うたが、約一時三十分程であつたと云ふことだ。多分當人のみ興味に乘り過ぎて、聽衆諸君には迷惑をかけたであらう。

二月廿四日は、同宿であつたから、一寸床次君と小話した。それから興津に出掛け、清見寺に詣し、而して此行の目的の一とも云ふ可き、父執松方老公の病を見舞うた。正作君と雅談に耽り、午餐の馳走に預つた。それから近衞公の病を訪ひ、近世日本國民史史料借覽の事を請うた。小學校に赴き、庵原郡の敎育會に出席した。此處でも註文に應じて、敎育と國民的精神と云ふ問題に付、少しく意見を開陳した。此れは約一時二十分ばかりであつた。西園寺公の門前を過ぎたが、政客沓至の折から、故らに遠慮して、名刺を警衞の者に託し去つた。

歸途には庵原村の乾家に赴き、其の三代相傳の梅の盆栽を觀た。家は山を背にし、溪に向ひ、水竹瀟洒何となく、桃源鄕にあらざれば、其の入口らしく想はれた。主人の需に應じ、其家に皆香園の名を附した。而して村長の需に應じて、此の村から產したる七大人の碑を大書した。七大人の第一は、山梨稻川先生だ。德川氏三百年間を通じて、有數の書家たる先生を傳ふるに、予の惡筆を以てす。慚惶の極みである。序でに靑年諸氏の爲めに、十數紙を洒揮した。

薄暮靜岡に還るの際、蓮永寺に立寄りて、梅花を見た。梅花と寒とは、附き物にて、外套の襟を立てても、尙ほ冷かなるを覺えた。併し寺門寂寞、梅花滿開、只だ山禽の、寺畔の崖樹に啼き度るを聽けば、何となく詩境に在る心地がした。同夜は又た餘儀なく洒揮した。殆んど半夜に至つた。

二月廿五日、亦た緩行汽車にて、歸途に就いた。諸友停車場に相送つた。此日は三日中の好天氣であつた。又た沿道の梅花を見て、東京に向うた。老妻は大森の假寓に、予は電車に乘り換へて出社した。

此行は秋山靑溪翁が、東道であつた。翁は固より靜岡、江尻、淸水、興津、及び庵原、その他の諸君に負ふ所多大であつた。逐一諸君の尊名を記すれば、繁に堪へざるが爲めに、一括して、玆に謝意を表して措く。

此行最も愉快であつたことは、富士山の見物であつた。大正八年八月以來、湘南觀瀾亭に於て、日夕富士と相對して生活したる予に取りては、昨年九月以來、頗る疎濶を感じた。然も此の三日にて、殆んど一年中に見る可き程に、飽く迄山を見た。此の山さへ見てゐれば、心中何の煩累もない。

聞說く攝政宮殿下、及び妃殿下の行啓に付き、沿道の警戒頗る嚴重にて、靜岡縣のみにても、五萬餘圓を費したと云ふことだ。鐵道沿線には、二十間に約一人宛の警衞を配置したと云へば、如何に全力を此に致したかゞ判知る。縣の官民の努力はさる事ながら、吾人は唯だ恐惶の次第に存ずる。何とか日本國民の力も

て、今少しく簡易に、御安泰を希ふ工夫はなきものにや。此れは靜岡縣に限つたことではない。

予等の在靜岡當時、女子の運動競技會があつた。予等と同宿したる三島女學校の生徒中には、レコード破りの好成績を收めた者ありと云ふことだ。巴、板額の再來、蓋し遠きにあらざる可き歟。

清水湊が市となつた。此れは自然の發展にて、喜ぶ可き事と思ふ。然るに興津に赴く往復の途中、其の近接の各戸に、市制反對と赤紙にて刷出したる札を、掲示したるを見た。此れは定めて何等か理由があらう。或は政友會と、政友本黨との軋轢の結果だと云ふ者もあつた。

松方公は九十の老翁、病無きも今は全く世外の人だ。況んや病むに於てをや。然も西園寺公の門前は、參詣者大繁昌だ。此は定めて銘々の希願ありての事であらう。今尚ほ靈驗著明なるや如何。老人を餘りに煩はすは、決して壯者の面目ではあるまい。天下の志士、今少しく自分の腕を揮うては如何。何時迄老人を擔がんとする。

茅舍竹籬連翠丘。　眼中頓覺好詩浮。
車行宛似跨牛背。　一路看梅入駿州。

東海閑遊

其一

大正十五年五月廿一日、清水鐵舟寺の一室に於て、此文を草す。清水港は、曉烟模糊の間にあり。富嶽は雲霧の中に眠つてゐる。

五月二十日早朝、修史室の高橋君と共に、品川を發す。車床閑々、車行悠々、休養としては、無上の仕合であつた。

天氣豫報で雨の支度をしてゐたが、案外の好天氣となつた。予は賀川豐彦君より

頃ろ贈られたる、新著雲水遍路を讀んだ。乃ち賀川君を案内者として、布哇から太平洋沿岸を馳せ廻つた。如何に奉仕生活とは云へ、賀川君も餘りに過度に働いた。病氣は必然の結果だ。況んや病後なるをや。希くは少しく自愛せよ。

五月雨に近き、空固より富士山の全面目を見るなどは、思ひも寄らぬ事。然も御殿場の富士山は、浮雲去來、倏忽變化、頃刻の間に、千態萬狀、逾よ出て、逾よ奇。

五月薫風過レ麓時。　綠陰幽草有二新詩一。

白雲浮動何多事。　掩映山容百態奇。

沼津にて諸友に出會、而して靜岡支局の橋本君同乘、三人相拉へて、蒲原なる寶珠莊に赴いた。未だ門に入らざるに、橘香冉々、人の衣袂を襲うた。

田中青山老伯は、八十四翁であるが、老健更らに健を加へ、欣然相迎へた。午餐を共にせんとのことにて、沼津で辨當を喫したるに拘らず、遠慮なく頂戴した。

老伯は横井小楠の事に就き、世間往々、彼を共和論者であつたかの如く、疑うたる事に付き、予の說を求められた。予は決して其の然らざるを辯じ。(第一) 彼が北畠親房神皇正統記を讀むの作を擧げ。(第二) 其の友人である藤田東湖、長岡監物を擧げ。(第三) 其の友弟とも云ふ可き元田東野、由利公正、米田虎雄を擧げ。(第四) 晩年奉仕したる明治天皇に關する、彼の敬虔、忠誠なる事實を擧げ。(第五) 彼の血統論を排し、堯舜禪讓を嘆美したるの詩は、單に純理學說にして、決して之を日本に當て篏めんとするものではなかつた事を辯じ。(第六) 彼の作として、世間に傳ふる天道革命論などは、全く彼を陷れんとする、反對者の揑造にかゝるものなるを語つた。

老伯は更らに小楠の書、三幅を出し、予の審定を求められたるが、何れも彼の眞蹟であつた。

其二

田中老伯は、頃ろ蒲原町の一町民として、町内の青年團に、團服を作り與へ、又

た在郷軍人會の世話をなし、其の援助にて蒲原町には、立派なる武器庫が出來、其處には三十八年式の小銃若干備へられ、其の階上は集會所として、使用せられてゐる。予は退休の老人達が、地方に散布して、田中老伯の如く、其の地方の爲めに、力を竭されんことを望んで止まない。

又た田中老伯は、蒲原城主北條新三郎が、小田原北條家の爲めに、武田の大軍を防ぎ、其の招降を拒絶し、遂ひに城と共に、身を以て殉したる志を憐み、其の寒烟、荒草の中に埋沒したる石碑を尋ね出し、新たに墓道を設け、其の墓地を治め、町の有志者を率ゐて、祭典を擧行したる事を語られた。

予等は其言を聞き、直ちに車を馳せて、其墓に詣した。墓は蒲原驛の東端の、小高き丘山にあつた。附近は蜜柑畑にて、花の香りは、何とも名狀し難い。墓碑は蘚苔半ば剝げて、隱々左の字が讀まれた。

于時永祿十二己巳十二月六日

常樂寺殿衝天良月大居士仁儀

北條新三郎殿

城跡は墓の後背に、今尙ほ巍然として、幾株の古松を標幟として聳えてゐる。新三郎の忠魂も、三百五十餘年の後、田中老伯の爲めに慰せらる。所謂る天定りて人に勝つものであらう。

歸來更らに寶珠莊の庭苑を逍遙した。天然に由りて、人工を加へ、而して更らに之をして天然化せしむ。老伯の造庭術は、三昧を得たに庶幾し。新くて寶珠莊に在る小半日、辭して江尻に抵り、北村、石野、深江諸氏に出迎へられ、相伴うて鐵舟寺に至り、例の如く月庵和尙に驩迎せられ、やがて相伴うて、附近の望岳臺に上つた。

此の望岳臺には、予が詩碑を建立せんとて、先年より有志諸君と相談し、其議は既に熟してゐるも、關東震災や何かにて、未だ著手せず。せめて今秋は、其約を

果さんと、予も考へてゐる。此處は富士山を眺むるに、少くとも最善の場所の一と信ず。予が百歳の後、魂魄此處に在りて、長へに名山と對せんと欲す。詩碑建立の由來、此の如し。而して未だ果さゞる也。

斯くて鐵舟寺の一室にて、有志諸君は酒、予と高橋君とは牡丹餅にて、會談した。蛙聲閣々、天然音樂の合奏、是れ亦た一種の幽趣を添ふ。諸君談話熟す。予は失敬して九時過ぎには床に就いた。

其三

大正十五年五月二十二日の曉、靜岡大東館電燈の下にて。

二十一日、清水鐵舟寺の客室にて、未だ顏をも削らざるに、靜岡から法月俊郎君が來訪した。天氣模樣、頗る面白からず。折角當てにしたる富士山も、殆んど其影さへ見せなかつた。

雨を衝き、伊藤月庵和尙を案内者として、觀音山に上る。鐵舟寺も和尙の二十年に亙る献身的努力にて、殆んど面目を一新し、且つ一新しつゝある。和尙の風彩は、殆んど乞食坊主の樣だ。然も檀家は固より、清水市民も、不二見村民も、和尙の無我的行爲に、隨喜せぬものは、殆んど無い。苟も一錢でも、一厘でも、得る所は悉く之を寺に納め、身につくるものとては、ほんの麻衣草履のみ。而して蟻が穴を掘る如く、兀々勉强し、此の破れ寺を、立派なものとなし、近日愈よ大分なる萬壽寺の足利芝山老師を聘し、大いに宗風を振ひ、而して自己は、專ら寺の復興を計るととしてゐる。實に末世に於て、奇特の坊樣だ。

山を下りて龍華寺畔の田村武治君の幽居を訪ふ。滿園の橘花、的礫として、其の芳香人を薫殺せんとす。轉じて大岡育造君の新居を訪ふ。大岡君は灸治の爲め、大阪に赴きて在らず。令息龍男君夫妻、代りて驩待せらる。龍男君夫妻は、其の病める父君の側に在りて、孝養を怠らず。龍男君は亡兒萬熊と同年にして、其の夫人は、故大岡長峽君の愛娘也。卽ち從兄妹同志の夫婦だ。故人の子女を見

る、猶ほ故人を見るが如し。

午餐は大岡君から鮨を贈られ、和尚の手打蕎麥、然も大岡夫人の接待にて滿腹し、雨を衝いて、諸有志に別れ、靜岡に向ふ。清水、興津から、態々來訪せられたる青年諸君の厚意謝す可し。

先づ靜岡支局に立ち寄り、葵文庫を訪ひ、大東館にて小杉、江崎、橋本、及び支局員諸君と、晩餐を共にした。大東館は、上は德川公爵より、下は修學男女學生の來泊にて、大繁昌、大混雜。只だ我等は雨を聽いて、靜かに安眠した。只今電燈滅す。已むを得ず閣筆。

本日は此れより直ちに東京に歸る。此行半は田中老伯を訪ひ、史料を得んと欲し、半は富士山を見んと欲した。前者は全く其の目的を達した、後者は全く失敗した。

伊豆遊記

一　大森より伊東

先頃來、小泉三申君から、伊豆の勝を語り、是非一遊をと勸められた。日本全國を股にかけたる顏の拙者も、恥しさことながら、未だ伊豆の入口のみを覗いた迄だ。乃ち渡りに船として、七月廿六日午前七時五十一分、大森發にて先づ熱海に向うた。同行三人、老妻及び修史室の高橋君。

小田原から先の汽車は、予に於ては初乘りだ。其の難工事であつたとは、云ふ迄もない。線路の側の崖には、撫子が今を盛りと咲いてゐる。根府川驛まで、伊東から太田賢治郎君が出迎へられた。君は醫學博士太田正雄君、卽ち文士として の木下杢太郎君の長兄だ。熱海驛にて東洵自動車社長の中村翁迎られ、驛前の茶店にて、小憩し、直ちに伊豆山から熱海ホテル邊を見物し、木の宮の巨樟を觀、そ

れから海岸に出で、金色夜叉の句碑なる側を廻り、一路伊東に向て快駛した。

熱海から魚見崎、錦浦邊の光景は、何時來ても絶景だ。俯瞰すれば絶壁の下、空洞をなし、潮水呑吐し、而してその上には巨巖が峙つてゐる。而して巨巖の上には、庭松も如かざる、枝振り佳き松が生じてゐる。而して近く海を隔て、初島が、老人の膝を枉げて安臥する如く、横はつてゐる。

斯くて網代を經由し、宇佐美隧道を過ぎた。其の入口の宇佐美隧道の字は太田君の説明にて、三申君の筆になると聞き、車を下りて之を見た。宇佐美城址を過ぎ、春日神社に詣し、其の巨樟の切株を見た。德川幕府の安宅丸の船材は、此宮から伐り出したものと、云ひ傳へてゐる。

熱海伊東間は、從來汽船の便あつたが、最近自動車道路開通せられて、更らに其の便を加へた。道は海灣に沿うて行くが、時としては海岸線の出入の爲めに、又たは山が皺襞をなし、溪谷ある爲めに、頗る曲折してゐ、若し長き陸橋をかけたらば、一直線に走るを得可きものをと、思はしむる場所も少くなかつた。それだけ遊覽道路としては、更らに興趣が加はつてゐる。而して初島は、恒に我等と相對し、その距離は、彌よ接近し來る。

伊東町の入口は、六間幅の道路にて、實に堂々としてゐる。我等は熱海から途中道草を食ひつゝ、七里の行程を、一時間餘にて伊東の暖香園に入つた、時に午後二時。

二　伊東遊覽

伊東は實に惠まれたる地だ。陸には溫泉が泉の如く、隨處に湧き出づる。海には水産が、到處に豐富だ。五十餘艘の發動漁船は、今や遠く鳥島邊迄も出掛けて、其の網し、若しくは釣りたる魚を滿載して還る。南、西、北は山に圍まれ、唯だ東のみ海に向て開いてゐる。夏は海上の涼風を受け、冬は背後の山にて寒氣を

遮らる。

我等は一浴の後、諸有志の案内にて、見物に出掛けた。大正十二年九月の震災には、津浪に見舞はれ、其の被害は劇甚であつた由なれども、今は殆んど復興して、其の痕跡さへも、旅人の目には、一寸見えかぬる程である。

我等は先づ流竄の頼朝が、伊東祐親の三女と、密會した場所と傳ふる、音無神社に詣した。此處は毎年十一月十日の夜、所謂る尻摘祭が擧行せらるゝ。それは祭典執行の間、燈火を點ぜず、神前での酒宴には、隣人に言葉も掛られず、尻を摘もて土器を廻はすが故に、斯く云ふとぞ。此邊には先住人の遺物がありとのことにて、杖の先にて掘りて見たが、土器の一片だも見出さなかつた。

それから諸方を引き廻された。音無の杜を過ぎ、佛現寺——妙照寺にて、天狗の詫證文なるものを見た。大槻如電翁は、當初朝鮮諺文なる可しとの鑑定書を與へたが、その後更らに到底譯けの分らぬものとの、長篇の詩を作りて、之を訂正してゐる。翁の如きは實に學に忠實なるものと云ふ可しだ。

佛現寺は、元來伊東朝高の館にて、日蓮上人伊東配流の際、此處に監禁せられたと云ふ。日蓮宗に取りては、大本山の一に位す可き場所だが、貧乏寺にて、とてもその見込がないとは、和尚さんの述懐であつた。

それから阪を上れば、伊東氏の館址だ。平かなる高地の上にて、要害は堅固だ。其の廣さ約八町、四方には物見塚、榎木塚、子神塚、堂の上塚など稱する、五六坪の小丘がある。物見塚の上には、天を摩する老松がある、之を物見松と稱してゐる。

我等は更らに畑のあぜみちを徑して、所謂る伊東祐親の墓に詣した。五輪塔は、餘り古さものではない。されど其上に聳ゆる老松は、實にそれよりも古さ歴史を語る。

それから急阪を下りて、青田の中を貫き、伊東家の菩提寺なる東林寺に赴いた。

而して伊東祐親の木像を觀た。又たその背後の山から掘り出したる瓶やら、土器を見た。斯くて久須美神社に詣して、巨樟を見た。其の周圍は五丈もあらんと思はる。眞中の空洞からは、少しく屈めば、出入自在だ。先年專賣局の役人が、惜しきものだ、之を伐つて樟腦を製す可きにと云うたとは、案内者の一人は語つた。此れから淨の池を見、湯鯉、毒魚、迅奈良等の諸魚を見た。蛇鰻が名物であり、其の長さ六尺、太さ一尺七八寸もあつたと聞けども、震災の爲めに逸出して、今は見えない。毒魚と云ふは、其の形と色とは鯛に似て、それよりも細長く、而して其の鰓には恐ろしき齒牙がある。併し毒にあらずして、蒲燒などにすれば、極めて美味であるとは、案内者の說明だ。

此れから湯の池やら、本湯などを見、問題となりたる鐵道省用の敷地を過ぎ、坂を上りて松月院に至つた。此處からは伊東全部の鳥瞰圖が、眼前に展開してゐる。宛も愛國婦人會の事業として、東京から兒童——概して貧にして健康ならざるもの——の夏季學校を開いてゐる。先生の中には、我等を知つてゐる人々もあり、その好意にて、茶を喫して去つた。

此れから踏韜澤を過ぎ、唐人川の川口に出で、三浦安針が、德川家康の命を奉じて、洋型帆船を作らしめたと云ふ跡を見た。其事は委しく我が『近世日本國民史』に說いてある。

此邊にも湯が湧き出でつゝある。若干の勞働者が、波打際の沙礫の溜りに浴しつつあるから、手をつけて見れば、東京の錢湯程の溫度がある。概して言へば、伊東全市は溫泉の上に立つてゐる町だ。

我等は伊東及び其の周邊をくる〳〵と廻り、最早點燈の頃となつた。されば最後に評判高き北里男の別墅を訪ひ、其の大浴池に一浴するとした。別墅建築の構造は、其中に入らざれば、知るに由なきも、庭は實に四邊の山を取り入れて、面白くある。門を入れば、鬼が燈籠を隻手にて捧げたる、南都東大寺にある、國寶

を模したものがある。又た玄關には青銅の双唐獅子が、番をしてゐる。

我等は浴池に泳ぐやら、舟に乘りて漕ぎ廻すやら、頗る愉快を極めた。其の深さは、爪立ちして頸元に達する程にて、短軀にて游泳の術を知らざる者は、僅かに周邊の石段の上に立つの外はない。大なる哉浴池、伊東人士が、其の公開を希望するも、所以ありだ。

三　伊東概說

廿六日の夜、伊東見物終り、暖香園にて、伊東町諸有志と會食した。此行豫じめ小泉三申君に、三敵退治を依賴した。（第一）揮毫攻め、（第二）演說攻め、（第三）宴會攻め。然るに能くも小泉君の威令は行はれ、伊東諸有志、能く其意を體し、我等をして十分に、其の目的を達するを得しめた。されば所謂る一般的宴會でなく、單に極めて小數者の會食で、然もアルコール抜であつたのは、寔に以て有り難き仕合であつた。

會者は中村長五郎翁、太田賢治郎君の外、大原坦、小穴甫吉、太田德三郎、上原重平、下村龜太郎、川口勝平、島田信平、坂田副治、稻葉敬三の諸君であつた。此中には國民之友第一號以來の愛讀者もあり、又た最近の國民新聞愛讀者もあり、中には夕刊第一頁に掲錄する予の小品文など、殆んど諳記しゐらるゝ方々もあるには、一たびは慚惶し、一たびは愉悅を禁じ得なかつた。予も斯くてこそ新聞記者たる甲斐もあれと思うた。

伊東は關西に於ける別府を聯想せしむる。云はゞ關東の別府であらう。其の奥も深く、其の左右も廣く、土地として發展の餘地が少くない。特に其の港灣は、漁港として石油發動機船が、日本の各處から出入しつゝあれば、今後に於ける盛運は、期して俟つ可しだ。されば土地の人士が能く協和して、其の開發を圖り、物價を平かにし暴利を貪らず、遠人を厚待して、四方の遊覽者を招徠せば、其の繁昌は期して待つ可きであらう。

但だ問題は交通の一點だ。是迄は東京から汽船で直航する乎、左なくば熱海から、汽船にて來る乎であつたが。今や自動車道路開通し、熱海から一時半を出ずして、山光海色を賞しつゝ、殆んど遊覽道路とも云ふ可きを、快駛して達するを得るは、先づ一段の進歩と云はねばならぬ。若し他日鐵道開通せば、其の便益更らに如何ぞや。

伊東町も、若し伊東祐親が平氏に與みせずして、賴朝方となりたらんには、尙ほ發展したらんにとは、小泉君の說であるが。然も賴朝方となりたる北條なども、今日では僅かに地名として、人の記憶に存する程なれば、まさか小泉君の云ふ如き譯でもあるまいと、同夜會食者の一人は語つた。過去は何れにしても、將來が大切だ。

今後百年、或は伊東祐親の名は忘れらるゝも、文士としての太田正雄君の名は、記憶せらるゝかも知れない。豫言者故郷に尊ばれずとの諺あれども、各位が太田正雄君の如き文士を生じたることを、伊東の誇りの一とせんとを、祈りて已まないとは、予が諸君に語つた一節であつた。

流石に諸君は察しがよい。餘り長座は妨げならんと、九時を過ぐるや、そろ〳〵引き上られた。斯くて我等は一日の清遊を了りて、安き眠りに入つた。

四　伊東　修善寺　天城

七月廿七日、意外にも昨夜の諸有志は、六時頃から見送りに來られた。七時には伊東を發した。中村君と、太田君とは更らに一日を、我等の爲めに費して同行せられた。

直ちに柏峠を上つた。斯くて我等は道を迂して最勝院を訪うた。寺は中大見村宮上にあり。如何にも形勝の地を占めてゐる。山門の前には、欅と樫の二喬木ありて、恰も天然の門をなしてゐる。茅屋根の大伽藍、見るからに心地よい。此寺の開祖は吾寶和尙にして、上杉憲忠の建立と云ふ。我等は開祖の頂相、及び後北

條氏の虎印古文書、岡江雪齋の古文書、及び秀吉天正十八年の古文書等を見た。而して寺の背後の崖上にある、上杉憲實の末子龍若の墳と稱するもの、及び開山塔に燒香し、山門前にて和尚と立ちながら、成る可くは今後も、此の茅屋根の儘にて願ひたく、止むを得ずんば瓦葺も致方なけれども、何卒亞鉛葺だけは、御免を蒙りたしと語つた。寺や宮が近頃亞鉛葺化するは、經濟上已むを得ざるとは申しながら、如何にも殺風景の極だ。

途中迄修善寺の役場、及び諸有志に迎られ、直ちに修善寺に赴いた。此處は今や電車が三島から通じて、交通には、尤も便宜を得てゐる。桂川を中に挾みたる谷地、兩山峽帶、其の規模小なれども、其の幽境たるは、今猶ほ古の如し。

我等は範頼の墓と稱するものを觀、而して頼家の墓に詣し、修禪寺に抵り、其の客殿にて、アイスクリームに焦腸を潤し、寶物を拜見した。明應八年の北條早雲寄進狀や、秀吉天正十八年の山門治安保護狀や、隆蘭溪の自畫像と稱するもの、寧一山筆の指月殿の三大字、其他各種の寺寶を見た。其中でも平政子寄進と傳ふる、宋槧法華經七卷は、尤物の一であらう。字は聊か行體を帶びて、豐潤。恐らくは北宋刊であらう。放光般若波羅密多經の奥に、征夷大將軍左金吾源頼朝菩提爲置之と特筆したるものに付き、和尚は果して平政子の親筆なるや否やを問うたが、それは何とも申されない。信じたき人は信ず可し、疑ひたき人は疑ふ可し。確かにそれと肯定す可きものもなく、確かにそれと否定す可きものもないと答へた。

同行の太田君は、頻りに前途を急ぎ、我等を驅り催はし、斯くて途中迄見送りの諸有志と相別れ、湯ヶ島に至り、村役場の樓上にて、舊記等を瞥見した。而して道は愈よ天城にかゝつた。

伊豆伊東より（棄書）

大正十五年七月廿六日、大森から伊東に向ふ。熱海から伊東までの自動車道は、實に快適なる遊覽道路だ。伊東では、諸有志に誘はれて、足底の痛む迄見物した。此處には國民新聞の愛讀者が澤山ある。心强きことゝ存候。本日は下田に向ふ。（大正十五年七月廿七日）

五　天城を踰ゆ

湯ヶ島より天城山にかゝる。予は大正八年の八月から大正十二年の九月迄、毎日逗子觀瀾亭より、天城を天の一方に望んだ。今や身は此の山中によりて、羊腸の路を自動車にて、迂廻しつゝ上り行く。

此山は云ふ迄もなく、伊豆半島の主岳だ。北方箱根の脈を承け、北東より西南に横はる。其の最高峰を大嶽と云ふ、標高實に一千四百米だ。我等の踰ゆる三方嶽は、八百八十米にして、思うたよりも險岨ではなかつた。

天城の中四萬餘町歩は、御料林なれば、其の手入の行き屆きたる、固より云ふ迄もない。本來樅、ツガ等が自然林であつたが、今や概して杉を植ゑてゐる。樅は比較的無用の木にして、且つ植林に害あり、さりとて切倒すも面倒なれば、藥を注射して、立ち腐れにした由にて、今も處々に巨木の立枯が、林中に聳立してゐる。併し今や製材器械の爲めに、樅も容易に製材せられ、それ〴〵利用せらるる、今更ら惜しさことをしたと、中村翁は語つた。

我等は途中にて、淨蓮の瀧を見た。瀧壺の傍まで下るには、聊か逡巡したが、七十六歳の中村翁が、先達にて飛び下るからには、餘儀なく其後につかざるを得なかつた。

愈よ頂上に達し、茶小屋にて、太田君の心入れの行厨を開いた。そは牡丹餅にて、豫て予の嗜好を知りたれば、昨夜特に製して携へ來つたものと云ふ。文章

禍を買ふ例はあるが、文章口福を博したる例は、此を以て破天荒とす。併し予の食量は、漸く高橋君の半ばに過ぎなかつたことを愧づ。

此處から殆んど自然の惰力もて下つた。而して澗溪開く所が、上河津湯ケ野溫泉だ。それから河津川に沿うて下れば、下河津の谷津溫泉だ。此處に面白き佛ありとて、太田君の誘引にて下車すれば、佛には出會する機會なく、却て朝日新聞の下村宏君一行と出會した。此れは此れはと互ひに茶を喫して小話した。我等は下田に向ひ、下村君一行は湯ケ島に向ふ。

我等は此れから奥地の或る廢菴に、藤原時代の佛像ありとて、赴かんとしたが、途中の道草にて、下田著の時間が追々後れたれば、思ひ止まり、附近の藥師堂に赴き、其の佛體に見參した。然も別に記す可き程のことはなかつた。

天城山を踰ゆる際には、猿は勿論、鯔さへも出會しなかつた。唯た道傍の石垣に、繩の如くぶら下りたる蛇を見た。併し大蛇でもなく、中蛇でもなかつた。引き伸せば五六尺の山かゞし。

六　模範村白濱

河津迄、賀茂郡の各町村長や、其他諸有志出迎られた。特に下田自動車株式會社長鈴木吉兵衞君は、上京中の所、我等の爲めに、本日早朝東京を發し、只今歸鄉して出迎られた。諸君の好意は謝するに辭なし。

我等は飯田白濱村長に導かれ、下河津村を過ぎて、右に山を望み、左に太平洋の海岸に接し、白濱村に入つた。村は讀んで字の如く、白沙の海濱を占めてゐる。田村又吉翁の稻取村が模範村であつたのは、既に過去の歷史だ。今や白濱村が、實にそれに代つてゐる。

此村は東西一里半に足らず、南北一里に足らず。其の戶數は四百二十五にして、人口は二千三百十四と云へば、決して大村ではない。併し村有財產は實に三十萬圓を超え、學校、罹災、育英、漁業等の諸資金を合すれば、四十餘萬圓に上ると

云ふ。

而して村には一人の不就學兒女なく、村立病院には帝大出身の醫學士あり、藥價治療費以外、他の費用を要せず。公設產婆ありて、無料にて巡回診察せしめてゐる。

斯る次第なれば、固より諸稅滯納などのある可き筈はない。本村は天草の收入、年々〳〵三十萬圓に近く、而して其の純益二十萬圓に近ければ、それのみにて、一切の諸稅を支辨し、其の剩餘は村民に分配して、尙ほ餘りある可きは、數字の示す通りである。

所謂る衣食足りて禮節を知るとは此事であらう。此れと申すも、天草の惠澤だ。

元來天草採收は、慶長三年、白濱村支配代官河原淸兵衞の手から、文政四年に至る迄、各代官の手に移り、村民は其の益金として、年々永〔永樂錢のこと〕九貫五百十文宛を上納して、田地の肥料としてゐたが。文政五年以來、水野出羽守の手に渡り、海面使用權を否認せられ、天草は寒天原料として、水野家より大阪方面に販賣せられ、爾來幾多の變遷を經、明治五年以來、若干の稅金上納の上、村にて採收權を獲得し。明治三十年以來、全く白濱村自營となり、以て今日に至つた。天草は實に白濱の恩神だ。極言すれば、天草大明神として祠るも、差支なきものだ。

我等は海中に斗出したる、小杜に分け入り、白濱明神社に詣した。此れは式內社にして、伊古奈比咩命神社だ。卽ち三島大神の后神であると云ふ。當初三島大神と與に、三宅島から此地に遷座ましたれば、此地が三島神社の本家であると云ふ說もある。例の大久保長安が、金山奉行として、伊豆に幅を利かしたる際は、祠堂や祭祀も、盛であつた。域內には既に枯死したる、若しくは將さに枯死せんとする眞柏がある。何れも千年以上と云ふが、それ程でなきも、その半ば以上であらう。又た其の杜には松の外に、其葉は槇の如く、其膚は百日紅に似たる

木が多くある。案内の諸氏に聞けば、あすなろと云ふが。恐らくはそれではあるまい。

七　下田港

我等は下田にて中餐のつもりであつたが、途中の道草にて、遂ひに七月廿七日午後四時過ぎ著した。白濱村に迎へたる、我が國民新聞の愛讀者渡邊太之助君は、三時間餘待つたと云ふ。下田でも附近から來集せられた諸君に、待ちぼうけを喰はしたとを、心外に存ずる。

我等は旅館松木にて、午餐の箸を投ずるや否や、汗をも拭かず、直ちに柿崎方面に出掛けた。下田は日本の開國史に取りて、最も重要の地の一である。而して予に取りても、頗る思出で多き地である。予は吉田松陰の筆者として、下田に就ては、明治二十五六年以來、屢ば語りてゐる。予は能因法師ではないが、坐ながら下田を知りてゐた。然も親しく其地を踏むのは、今日が始めてだ。

下田は志州の鳥羽と共に、日本船の時代には、闕く可からざ要港であつた。苟も江戸と大阪との間を航行するには、其の西する者は、下田に入らざれば、鳥羽に入り、其の東する者は、鳥羽に入らざれば、下田に入る。下田は遠州洋七十五里、相模洋四十五里の中間に在る要港だ。

予は下田に失望しなかつた。其の市街は一瞥したるだけでも、何となく古色があつた。長崎程の色彩はなきも、決して殺風景ではなかつた。而して其の港灣の風景、實に愛す可きものがあつた。歴史を除却しても、詩思を催す可き土地だ。況んや史趣横溢に於てをや。

下田は南は城山、松が峰、西は鋪根山、乳房山、北は武峰等を負ひ、東は港灣に臨んでゐる。而して稲生澤川は、溶々として町に沿うて流れてゐる。其港は市街の東に在り、西は狼烟崎、東は洲佐利崎と相對して、港門をなし、西南に開いてゐる。港口の幅員約八チエン、而して北西より東南の間は、山嶺屏列するが故に、

南風、及び西南風以外は、能く風浪を防ぐに足る。

其の港域は、下田、柿崎、須崎に及び、港の西には大浦、鍋田の二小港あり、又た灣内には犬走、睢島、天辨の諸嶼あり、又た灣口には赤根島がある。而して港灣の外には、遙かに神子元島の燈臺が見ゆる。斯くて是等が點綴して、能く下田の風光を美化してゐる。攘夷僧月性が、下田條約の際に『七里江山附二犬羊一』と憤慨したのも、今更ら同情に禁へない。

下田より（葉書）

七月廿七日昨夜微雨、相曇り、午前七前伊東を發し、修善寺を見物し、天城山を踰え、河津なる谷津に抵り、それより白濱を經て、下田に達したのは、午後四時頃であつた。直ちに松陰先生や、ハルリスの遺跡などを訪ひ、夜は舟を港内に浮べて月を賞した。（大正十五年七月廿八日）

八　柿崎辨天及び蓮臺寺溫泉

我等は先づ柿崎辨天に赴いた。潮干れば歩す可く、滿れば舟す可し。陸に接した る小嶼、其の小高き所に辨天堂がある。其の附近には眞柏がある、松がある。懸崖には姫百合が、今を盛りと咲いてゐる。

此の辨天堂は、松陰先生一宿以來、其儘だ。先生の回顧錄に曰く、

下田に一川あり、川中小舟數多あり。因て是を盗て出んと欲す。但櫓なし。更に探索して二梃を得、乃ち舟に乘り流に沿ひ海に出づ。川口番船數隻あり、吾等心頗動く、因て澁生に謂て曰く、番船覺して、吾を捕るは天なり。天若し靈あらば、決して覺せず。已にして難なく此を過ぎ海に出づ。海波洶湧、櫓施し得ず。

且下田岸より鮑厦旦船〔彼理坐乘の船〕に至る迄、頗る遠し、事成し得難きを

謀、舟を捨て岸に登り、後擧を謀る。時に天未だ明けず、柿崎辨天祠に入て一臥す。天の明るを覺えず、人來て祠戸を開く、吾二人大に驚く、而して其人の驚く、更に吾より甚だし。

此れは安政元年三月廿五日の夜の事だ。吾二人とは松陰先生及び金子重輔だ。村人も意外なる人が、此の祠堂の中に眠りつゝあるを見て、一大驚を喫したであらう。

我等は此れから玉泉寺に赴き、日米交渉史上に、最も重要なる數頁を加へたる、米國總領事ハリスの寄寓したる跡を見た。其の域内には、米人の墓もあれば、露人の墓もある。前者は香火料絶えざるが爲めに、掃除も行屆きてゐるが、後者は草萊の中に、石塔も半ば沒してゐる。一切平等觀よりすれば、餘りに差別過ぎる憾がある。

此れから吉田松陰先生が、疥癬を療し、且つ米艦搭乘の機會を俟つ可く、滯在したる蓮臺寺の溫泉に赴き、百數級の石級を上りて、國寶の大日如來を拜し、更らに溫泉宿に投じ、始めて伊東以來の汗と埃とを、蓮臺寺溫泉に流し去った。

廿日晴　余疥癬稍發す、因て間を偸み、蓮臺寺村に往て、溫湯に浴す、村は下田を去る一里にして近し。是夜澁生は下田に歸る、余は村に宿す。

廿一日　澁生蓮臺寺村に來る。晡時村を發し、海岸に往き、夜五ッ時まで徘徊して、夷船夜間の狀を察す。下田の前宿に宿す。

二十二日　是夜蓮臺寺に宿す。

二十三日雨　朝簑笠を借り、村より下田に歸る。

二十四日　是日行囊を提げ、澁生と同じく蓮臺寺村に往き宿す。

而して廿五日の夜が、乃ち前記〔第七參照〕柿崎辨天に眠つたのだ。

九　月夜の下田港

伊豆國賀茂郡の各野村長は、相擧りて我等を迎へ呉れた。而して諸君は我等に

向て、伊豆が東京と遠からざる距離にありつゝも、交通の不便の爲めに、殆んど孤立の情態に取り殘されたる現狀を語り、速かに伊豆巡環鐵道の完成せんことを希望した。我等も深く其意を諒とした。

斯くて廿七日夜は、下田港に小舟を浮べて、月を賞せんとした。東坡先生でも、まさか我等の如く、石油發動機を利用するの方法は、知らなかつたであらう。

我等は暗夜に下田港灣の内を、縱横に乘り廻はした。風もなく、浪もない。併し水面には自から一味の凉がある。已に船を回さんとしたが、せめて月の上るを待つ可しとて、錨を灣内に卸して、徐ろに安政元年三月廿七夕、松陰先生米艦搭乘失敗談を繰り返し、坐中の村松春水翁は、頻りに灣内を指點して、彼處にはミシッピー號の舶した、此處にはボウバタン號が舶したなどゝ語つた。而して更らに向ふの一角を指し、先生等の舟の流れ着いた處を示した。

斯くする間に、月は上つた。今日は舊曆の十七日とも、或は十八日とも云うたが、何れにしても月光は灣内に滿ち、所謂る『海上明月共レ潮生』の句の實況に接した。伊東の太田君は、頻りに大島節などを謠うた。併し魚龍を立て舞はしむる程には到らなかつた。

松陰先生の失敗は、天なり、命なりであつたが、若し先生が今日の學生の如く、操舟の術を解したらば、或は甘く行いたかも知れぬ。序でながら先生の『三月廿七日夜記』を拜借する。

三月廿七日、夕方柿崎の海濱を巡見するに、辨天社下に漁舟二隻泛べり。是究竟なりと大に喜び、蓮臺寺村の宿へ歸り、湯へ入、夜食を認め、下田のやどへ往とて立出で、武山の下海岸に夜五つ過「午後八時」まで臥す。五つ過此を去、辨天社下に至る。然るに潮頭退き、漁舟二隻ともに沙上にあり。故に辨天社中へ入り安寢す。

先生等は下田名主が、夜行を禁ずる故、下田と、蓮臺寺と、双方に宿を取り。下

田からは、蓮臺寺に赴くと云ひ、蓮臺寺からは、下田に赴くと云ひ、夜行して、米國船の樣子を探つたものだ。而して何時も辨天社を、無斷にて無料宿泊所に充てゝゐた。

八ッ時〔午前二時〕社を出て舟の所に往く、潮進み舟泛べり。因て押出さんとて舟に上る。然るに櫓グイなし。因て櫂を犢鼻褌にて縛り、船の兩傍に縛り付け、澁生と力を極めて押出す。褌絶ゆ、帶を解き、櫂を縛り、又押ゆく、岸を離るゝと一町許、ミシッピー舶へ押付。是までに舟幾度か廻り〳〵てゆく、腕脫せんと欲す。

斯くて漸く米艦に達すれば、要領を得ず。以後の事は、予が『吉田松陰』に詳なれば、今茲に記する要なし。村松翁は、先生が櫓グイなしと云ふも、それは間違であらう。如何なる舟でも櫓グイなきものはない。但だ先生等も櫓綱なかりし爲め、櫂を縛して、漕ぎ行いたものであらうと。是れ實際に照らして確かに一說だ。されど先生は、

其事の破れの本を尋れば、櫓グイなき計りにて、かくなりゆけり。因て思、左傳某の役の敗を記して、驂挂而已とやらあり、大軍の敗もかゝる小事に因ることなり。左氏知レ兵、故に其叙レ事甚妙なり。

と云うてゐる。是亦た一說也。

我等は月を見たれば、村雲の掩はぬ先に、引き上げた。斯くて下田の一夜は、實に炎熱窩中に拘はらず、穩かに眠つた。

十　下田を去る

七月廿八日下田發足前、昨夕見殘したる諸所を見物した。了仙寺は日蓮宗の寺にて、彼理上陸應接所である。寺には當時の紀念物の外、種々の文書、遺物等もある。其中にも享保年間に於ける、了仙寺と長樂寺との、境域係爭に關する判決書の如きは、殆んど一坪もある可き大紙幅にて、表面に兩寺接境の地圖があり、裡

面判決書類及び當該官吏の姓名書判がある。其の役員の一人には、例の大岡越前守もある。而して遺物中には、下田奉行今村傳四郎の、大阪陣にて働きたる十文字鎗身がある。我等は更らに其の域内の今村氏三代の墓に詣した。今村氏は實に下田の恩人だ。彼は築港を作し、水道を設け、道路を改鑿した。下田の今日あるは、彼の賜大に居る。

此れより長樂寺に赴き、松陰先生が、寺號既に長命と云ふ、我命未だ盡きざるなりと云うて、其の慈容を拜したと云ふ、長命寺の觀世音を見た。長命寺は今や廢寺となりて、觀音樣は、此處に借屋をしてゐらるゝ。

此れから大浦に出て、海水浴場を見、松陰先生の宿屋や、ハリス妾お吉の墓前を過ぎ、鈴木君の武山閣に上り、其の佛像を見た。其數を以てすれば、木佛、石佛、金佛、泥佛、あらゆる佛達があり、又た場所を以てすれば、西藏の秘佛、緬甸、暹羅の諸佛、支那、日本は云ふ迄もなし。能くも斯く集めたものかな。

但だ予は君が先住民の遺物採收の爲め、近郊にて偶然發見したりと云ふ、文保元年の年號人、南無阿彌陀佛の板碑には、尤も隨喜せざるを得なかつた。若し亡兒萬熊をして、之を見せしめば、恐らくは其前を去る能はなかつたであらう。

我等は斯くて松陰先生の留置せられたる長命寺趾や、又た其の檻禁せられたる平滑なる、番太郎の牢屋の跡を見た。そは今や牛馬繫場となり、其前の井戸には、二三婦人が洗濯しつゝあつた。而して其傍には、大なる向日葵が、驕陽に向て咲いてゐた。村松翁は、松陰先生が『獄只一疊敷兩人膝を交て居る、頗る其狹きに苦む』とあれども、其實は三疊程であらうと訂正した。併し何れにしても狹きに苦しんだことは、間違あるまい。

我等は名殘り惜しくも下田を立つた。下田は實に思出多き地である。緣があらば重ねて遊びたい。

十一　下田より手石石窟の彌陀三尊

我等は下田を辭し、竹麻村に至り、港の海軍病院を見た。構の内外を併せ、敷地二萬坪ばかり、門内には菊芋や、向日葵が、滿開だ。病院より直ちに松林を徑して海濱に出づ可し。而して後には山を負ひ、翠巒に連る。院中には賀茂より引き來れる一大溫泉の浴池あり。予は寧ろ病なくして、此の病院の客たらんことを、望まざるを得ない。

内藤軍醫中佐の案内にて、其の善美を盡したる現狀を見、玄關にて、記念撮影した。而して其の附近の大野久次翁の邸に至つた。翁は地方の德望家にして、曾て選良として衆議院に在り、今は小泉君に讓りて、其の同志者の有力なる一人だ。翁の家は近世的でなく、如何にも地方の舊家たる風情ありて、興趣が饒かつた。此處は港村―今は小字だ―の桃とて、桃の名所だ。予は遠慮なく數顆を喫した。且又た修禊寺住職の携へ來れる國寶大般若經の若干を拜見した。其の卷末には大治五年書寫、伊豆守大江通國、源盛賴及び靜尋一校等の署名がある。現有五百三十九卷と云ふ。文字は率直に云へば、左程結構とは思はぬが、但だ其の卷末に掲げたる如上の名によりて、國寶となつたものであらう。

大野君の邸前にて、下田から送り來れる諸君と辭し、我等は道を迂して手石川に沿うて下つた。此の川口が卽ち鯉名港だ。史を按ずるに、伊東祐親は、先づ次子祐清を平氏の軍に投ぜしめ、自から之に續く可く三島に至つたが、途上源氏の兵に扼せられて果さず。海路駿河に至る可く、船を鯉名に泊したが、西風猛烈の爲めに纜を解く能はず。遂ひに之を偵知し、來り攻めたる天野遠景と鯉名濱に戰ひ、左股に傷を、捕られたのは　治承四年の事だ。其の古戰場も、今は桃畑や、桑畑や、玉蜀黍畑に化してゐる。

手石川を渡りて、海濱に至れば、竹麻村の青龍寺和尚は、其の塾生を率ゐ、有志諸君と道傍に迎られた。其中には國民新聞の愛讀者もあつた。和尚は直ちに用意したる孤舟に我等を誘ひ、阿彌陀窟參詣に漕ぎ出した。一帶の巉巖絶壁は海中に

斗出して、其の附近には無數の暗礁や、顯礁が、水面の上に起伏してゐる。我等は舟を廻らして岬角を過ぎ、彌よ阿彌陀窟の中に舟を入れた。風浪の時は勿論、餘りに潮滿れば、舟は洞穴の中に、自在に動くことが難い。我等は仕合せに風なく、浪なく、而して舟中に起立するも、頭が洞穴の天井を摩するには、若干の餘隙があつた。而して舟の洞穴内に入るや、やがて彌陀三尊の光明が、赫灼として拜せられた。此れは信心者でなければ、容易に出來難きことにて、晩秋から春初にかけては、幾回來りても、拜し得ざる者ありと云ふ。

併し我等は三尊よりも、此の附近の風光が、より難有かつた。而して夫婦の海士が、扁舟の裡に共稼ぎをなし、妻は海中に潜り、夫は其の命綱を手操りつゝある樣などは、如何にも浮世離れしたる心地がした。若しや人生の幸福とは、此の光景ではあるまい乎。

十二　竹麻より子浦

我等は下賀茂溫泉を貫いて過ぎた。溫泉は土中より噴出する幾丈、實に奇觀だ。此の方面は、殆んど處女地と云ふ可きに庶幾い。斯くて山百合の花が、草や茅の間に咲きつゝあるを眺め、山峽を過ぎ、阪路を上れば、眼下に明鏡の如く、小灣の横たはるを見る。その麓に見ゆるが妻良で、其の向岸に見ゆるが子浦だ。

阪を下りて灣頭に出づれば、一部落がある。卽ち妻良だ。此處には妻良の殆んど全部、及び子浦の諸有志、何れも出迎はれた。而して籐笠、葛衣、野人其儘の風貌にて、小泉三申君も亦た出で來つた。妻良は灣の入口にあり、子浦は灣の極まる所にあり。其灣は袋の如く、口狹くして奥深し。三申君が予に向て、如何に水滸傳中の光景を見ずやと云うたのは、如何にも其通りと首肯せられた。

妻良は子浦に對する妻浦であらう。傳說には事代主命の妃、滿機姫命が、御船に乘りて此浦に著し給ひしと云ふ。今や防波堤修築中にて、朝鮮の勞働者が、働いてゐるのを見受けた。

妻良の名は、東鑑にも出でゝゐる。

元暦二年三月、武衡〔頼朝〕爲レ征ニ伐平氏一、兵船三十二艘、日來浮ニ于伊豆國鯉名泊、並妻良津一、被レ納ニ兵粮米一、仍早可ニ解纜一之由被ニ仰下一。

とある。兎に角古來から伊豆西海岸要港の一であつたらう。

我等は直ちに小舟に乘じて、灣内を一直線に子浦に向うた。此の灣は小なれども、東、南、北は、皆な山に圍まれ、單だ一面西に向て開くが爲めに、冬季港口より來る强風を除けば、頗る安全だが、惜らくは灣内が狹い爲めに、大艦巨船の碇泊には、不便であらう。

子浦に著すれば、殆んど總ての人々を擧げての驩迎にて、今更ら慚惶の至りであつた。我等は天狗窟の下なる磯邊に上陸し、德川將軍家茂が、上洛の際、西風の爲めに航海出來ず、宿泊したと云ふ西林寺の前を横ぎり、阪をなしたる半漁半農商の部落を上り、小泉君の王父君が、愛孫の前途を祝福して、手栽したと云ふ蒼松の下を歩し、淨行院に到達したのは、七月廿八日午後二時過ぎであつた。淨行院とは、小泉君の別邸の名だ。固より寺ではない。

邸は山を負ひ海に臨み、坐して子浦灣の勝景を占む。我等は山より滾々と流れ來る水に、塵埃の顏を洗ひ、先づ一浴し、浴衣がけにて、午餐の饗應に預つた。食膳には淡竹あり。小魚の生作りあり。鰺の干物あり。小鮑の佃煮あり。とても僻所では、口にし難き珍味が羅列せられた。

十三　石室崎

我等は箸を投ずると間もなく、三申君に誘はれ、濱邊に出で、鮪釣船―石油發動機船―に乘り、石室崎見物に出掛けた。石室崎或は石廊崎と云ふ。伊豆の極南端の岬だ。

概して伊豆の西海岸は、鮫の齒の如く、小刻みに海岸線が出入してゐる。而して太平洋の激浪と、火山の作用にて出來りたる鎔岩及び集塊岩、凝灰岩等と相搏

ち相爭ひ、其の勢ひの激する所、或は洞穴をなし、或は奇礁をなす。或は筍の如く、或は菌の如く、或は角力取の立つが如く、或は醉客の躍るが如き、實に何とも形容が出來ない。

予は三申君及び東道の諸有志を顧みて、已に此景あり、朝鮮の海金剛も、其美を專らにする能はずと云うた。我等の船が、漸く石室崎に近かんとする際、沖の方に頻りに鰹釣舟の活動するを見、すは面白しと、直ちに船首を其の方面に向けて駛つた。

舟は三隻で、半圓形をなしてゐる。海面は魚群にて紫色をなしてゐる。各船より釣竿は、千手觀音の手の如く出でゝゐる。其の乍ち投じ、乍ち引き上げるの迅業、とても天勝の手品でも、及ぶまいと思うた。魚を釣ると云はんよりも、魚が隨意に、竿にくつついて上り來るのだ。其の魚が水面からキラ〳〵として上り來る光景は、爽快と云はん乎、痛快と云はん乎。

我等は船首を回らして石室崎の麓を迂回し、長津呂に向うた。長津呂は卽ち長瀞だ。海水が兩岬の間に深く彎入したるが爲め、斯く名づけたものであらう。此の附近の岩は、宛も饅頭の餡を喫盡して、其の外皮だけ剩したるが如き狀をなしてゐる。長津呂の諸有志亦た來り迎られた。我等は舟を捨てゝ、巉岩を上つた。三申君は元來室內生活を好み、屋外生活に懶き者。但だ今回は我等の東道主人たる爲め、自から彊めて同行したることなれば、其勞同情に堪へたり。乃ち我等屋外生活の僻好者も、炎天の最中、劍鋩を欺く、巉巖を登攀するには、如何に心頭を滅却しても、疲困を感せざるを得なかつた。然も巖角に取り附き、漸く絕頂に立ち、太平洋の風を、滿面に受けた時には、人間の快味を、獨占したるが如き心地がした。

石室崎は、前記の如く伊豆最南端の岩崖の一高岬にして、東北東凡二海里の間、露岩、暗岩最も多く、航海者にはそれ丈危險であるが、觀覽者には却て快哉を叫

ばしむ。直前は太平洋、左は相模洋、右は遠州洋、而して伊豆七島は、髣髴として、淼茫の際にある。

我等は石室崎の最も海中に突出したる、巉巖の上に立て凝視した。巖には古來幾火を燒きたる痕がある。此れは好意的に解すれば、今日の燈明臺の用をなしたるものであつたらう。然し橘南谿の東遊記を見れば、

此火の光りを見て、人家やあると寄せ來れば、忽海底の岩に觸れ、打碎けて破船に及ぶ。翌朝浦々の人々、破船せる荷物道具を取り掠む。

とある。何れにもせよ、今や昇平の天地、石室崎の燈臺は、長へに航海者の安全を護りつゝある。

神皇正統記延元三年九月、義良親王伊勢より奥州下向の條に曰く、

七月の末つかた伊勢に越させ給ひて、神宮に事の由を啓して、御船のよそひし、九月の始め纜を解れしに、十日比の事にや、上總の地近くより、空のけしきおどろ〳〵しく、海上荒くなりしかば、又伊豆が崎と云方に漂はれ侍りしに、海いとゞ波風おびたゞしくなりて、あまたの船行方知らず、侍りけるに、皇子の御船は障りなく、伊勢の海に著かせ給ふ。

とある。されば義良親王の御船は、此の石室崎に漂著し、此れから伊勢に還らせたのであらう。

石室崎大權現は、此の突端より小しく長津呂の方面に寄りたる中腹にある。安積艮齋の遊豆記勝に、

海崖極めて巉絶、上に木欄を結び、顛墜に備ふ。蛇行して下る。絶壁中巨窟在り、人の能く梯する所に非ず。而して石廊權現祠乃ち其内に安んず。絶奇と謂ふ可し。祠廣さ數十筵、帆檣を以て基と爲す。……窓を啓けば、則ち下は不則の淵に臨む、……久しく視る可らず。祠外巨巖突起、匍匐して其上に出づれば滄溟萬里、天を浮べて岸無し。